

---

# ジキア 2

露露

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジキア2

### 【Nコード】

N8391H

### 【作者名】

露露

### 【あらすじ】

メンバーを一人加え、新たな旅に出た退治屋ジキア。訪れた町で起こる出会いと事件はリシュ戴尔と伝説の魔物に何か関係があるのか？アッシュとリゼの恋にも注目の、ジキア第2弾！

## プロローグ

この世界には、人間の数だけ悲しみがある。  
憎しみがある。  
後悔がある。

ただ開放してやればいい。  
楽になれる道へと。

破滅への道へと。

\*\*\*

「あ、そこのお兄さんっ　　お店寄ってかなあ〜い？  
安くしとくからあ〜、ねえってば！」

夜のネオン街の客引きはこの辺りには星の数ほどいる。  
それだけ需要も多かった。  
声をかければ大抵の男は引っかかるのだ。  
同じ言葉を繰り返すだけでいい。

この客引きの女もいつもと同じ調子で、

目の前を通りかかった “獲物” を逃がすまいと、  
無言で過ぎ去ろうとする男の後を追う。

「お兄さん仕事帰り？ 疲れてるんでしょー？  
私なんでも話聞くわよお、嫌な上司とかいる？  
あゝ、無言っていうことは相当悩んでるわねえアナタ！  
ほらっ、隠したって顔を見れば」

客引きの女は強引に男の前に立ちはだかり顔を見上げた。  
ネオンに照らし出された青い瞳が冷たく光り、  
女は言葉を失くす。

客引きの直感か。

あるいは単に人間の持ちうる本能か。

危険である、と。

男はじっと、行く先を遮る女を見下ろしていた。  
女は引きつった表情で笑うと、  
それ以上何も言えずに身をずらす。  
そのまま後ずさるように男から離れた。  
男は振り返りもせずまた真っ直ぐ歩き出し、  
暗闇に消える。

「はあああ、こわっ！ あぶねーあぶねー」  
「どうしたの？ 言葉遣い気をつけなよ」

同じ店の仲間が女に声をかけた。  
女は軽く首を振ると腕組みをする。

「さっきの男見た？」

何かイイ男そうだと思つて声かけたんだけどさ、  
目がマジ怖かったんだよね！  
あれは人殺してきてるね！」

自信たっぷりな断言する。

が、仲間の女は興味の欠片も見せずに夜の街を見詰め続ける。

「人殺し見たことあんのアンタ？」

「そりゃあ……ないけどさ……とにかく！

危険な二オイがしたのよ。

適当に声かけて殺されちゃたまんないわ。

気をつけなきゃ」

「そーね、気をつけてね。

ほら、また来たよ、アンタのお得意様」

適当に相槌を打ち、仲間の女は店へと引き返す。

女もすでに見飽きている中年男の姿を確認すると、

とびきりの笑顔で飛びついた。

夜はまだまだ、これから。

\*\*\*

どれだけ時が経てばいいのだろう。

鈴の鳴るようなかわいらしい笑い声。

春先に近くの野原に出かけた事。

どんなに遠くにいても自分を呼ぶ声だけはすぐに分かった。

……春が来ると必ず思い出した、これはつらい記憶だ。

はじけるような笑顔。

夏の強い日差しも気にしないから、毎年黒く日焼けしていた。  
健康的な肌の色。

……夏はどこに行っても目にしてしまう色。

いつからだろう、夏に外へ出るのが恐ろしくなったのは。

小さくて暖かい手。

寒い冬はとてつもなく恋しくなる。

……願わくばもう二度と冬などやって来て欲しくない。

(……秋)

もしかしたら秋だけは？

微かに胸が高鳴った。

(……紅葉)

そうだ。

やはり忘れてなどいない。

秋には一緒に色とりどりの葉っぱを拾ったのだ。  
なんて幸せな思い出なのだろう。

落ち葉が風に舞って、君はまるで妖精のようだった……  
そう、秋は一番つらい季節なのだ。

胸が締め付けられるようにきりきりと痛む。  
泣きたくて泣きたくてどうしようもなくなる。

……だからもう長いこと紅葉を見ていないのだった。

忘れた筈だったのだ。

これらすべて。

これまでもずっと笑えていたのに、  
運命を運命と受け入れていたはずなのに。

私は一人になった。

思い出ばかりが自分を苦しめる。

もう十分に耐えてきたと思う。

どの季節が来ても私の心はつらいままなのだ。

ここにはもう何も無い。

あるのはただ、苦しみだけ。

「私は間違っていない……」

こんなにもつらいのに、

どうして私を責める事ができる？」

楽になりたい。

目を閉じて、もう二度と、

季節の移り変わりなど見なくてもいいところへ行くのだ。

そう、目を閉じて。。。

「！」

額の、何か刺すような冷たい感覚に、

男はハッと目を開いた。

まず視界に映ったのは、人間の手。

人差し指が額に当てられていた。

男は立ち上がるうとしたが体が動かない。

そのまま視線だけを上に移動させる。

そこにあつたのは無表情な若い男の顔だった。

「あ、んた、どこから」

かろうじて発した声が掠れた。

気付けばもう声も出なくなっていた。

「お前は俺を必要としている。

楽になる方法は一つではない。

もっと簡単なやり方を教えてやる」

感情の欠如した声色に恐怖を感じながらも、男は、  
そうか、と心の中で頷いていた。

(もっと簡単に楽になれる方法……この人なら私を)

額に当てられた男の指が微かに発光したのを男は見た、  
と思う。

それと同時に頭の中が真っ白になった。

ただ相変わらず無感情な男の声だけがやけに耳に残る。

「心を解き放てばいい。

欲しいものがあるはずだ。

心が欲するままにそれを手に入れる。

簡単だろう？」

ふっと、男は力なく椅子の背もたれに凭れ掛かった。

まるでそれは自らが望んでいたように、目を閉じたまま。

「一つだけ条件を付ける。



もしも “ 奴 ” が現れたら俺に伝える。  
心に思っただけでいい」

若い男は肩で蹲ひづる小さな生き物にちらと視線をやる。  
そしてまた目の前の動かない男を見下ろすと、そつと呟いた。

「名は、 “ アッシュ ” 。

“ ジキアのアッシュ ” だ」

雲間から覗いた月光が暗い室内を照らし出し、  
影を一つだけ作り出していた。

## プロローグ（後書き）

ペースは遅いですが（本当にすみません）他の作品同様「完結」を目指して書き続けます。興味のある方はぜひ、読んでみて下さい。感想・ご意見・ダメだしその他諸々何でもお待ちしております。読んで楽しんで頂ければ幸いです！

## 第一章 “もっと” で始まるすれ違い 1

第一章 “もっと” で始まるすれ違い

『……路上で生活する子どもたちを狙った犯罪が増えています。人身売買、性犯罪、殺人など悲惨な事件が多く、

中央政府は民間団体と協力してこれらの再発防止に努めると同時に、

引いてはこうした子どもたちをなくすことが出来るよう対策を練っていくと、

こういうことですが、

それにしても最近はやたらと凶悪犯罪が増えてますよねえ！

毎日のように殺人事件のニュース見かけるし、

もっと明るい話題が欲しい所です。

リスナーの皆さんも身の回り十分気をつけて下さいね！

それでは音楽いきましようか、

なんと初登場一位です！

ジェイ・ローの新曲で “I want kiss you” 『

決して悪くないミディアムバラードの音楽が車内を包み込んだ。

午後の穏やかな時間に加えてさらに眠りの世界へと誘うかのようだ。

堪りかねてアッシュはラジオのスイッチを切る。

「えー、切らないでよアッシュ！

私ジェイ・ローのファンなの！」

キキが後部座席から身を乗り出してラジオのスイッチを入れる。  
男にしては細くきれいな歌声が再度流れた。

「マジで勘弁！ 事故りそう……」

アツシユがもう一度ラジオのスイッチを切った。

キキが「はぁ」とため息を吐くのが聞こえてくる。

アツシユは欠伸を一つすると、違うボタンを押す。  
するとノリの良い曲がかかった。

「うん、これこれ」

にこにこアツシユは少しアクセルを踏み込む。

しかし、すぐ後ろからキキの声。

「リっちゃん起きちゃうわよ」

「う……」

すぐさま音楽を切り、車内はまた無音となってしまう。

それはそれでアツシユにとっては眠くなるシチュエーションだ。

アツシユはちらっと、

助手席に座り窓の外を見つめているジュニアへ視線をやる。

が、すぐに首を振ると視線を戻した。

（いかんいかん。

ジュニアとはさつき交代したばかりなんだ……）

アツシユは前方を見つめ、また欠伸をする。

さっきのラジオでもこの無音よりはましなようだ。

アツシユは仕方なくラジオのスイッチを入れた。

ジェイ・ローが気持ち良くサビの部分を歌っていた。

「きゃー嬉しい！ アツシュいいの？」

「おう。音があった方がましだからな」

アツシュに振り向いたジュニアが、

じっとアツシュの眠たそうな横顔を見つめて少し微笑んだ。

「アツシュ」

「ん？」

「運転代わるうか？」

「マジ!？」

思いもかけない言葉にアツシュは即答する。

してしまつてから、申し訳なさそうに口を開く。

「あーでも、代わつたばつかでいいのか？」

「やっぱり俺ももう少し……」

「次の町まであと一時間程度だし、それに、

自分の命が惜しいだけだよ」

「ハハ……悪イ」

そう言つてアツシュは端に車を寄せた。

ジュニアと入れ替わり、助手席でほつと息をつく。

ジュニアはすやすやと眠るリゼを考慮してゆっくりと公道に戻つた。

アツシュ達一行が中央の街を出て一週間が経っていた。

小さい町をいくつか通り抜け、ようやく、

中央から一番近い比較的大きな町まで一時間という所まで来てい

る。

まずはこの町でしばらく根を下ろすことに決めていた。

決して焦って旅を進めている訳ではないが、

闇雲に旅が出来るほど悠長にもしていられないと、

何となく皆が感じていた。

まだ何もかもが闇の中で何一つ手がかりはない。

それどころか旅の目的である 「リシュデイル」 を探し出したとしても、

それから具体的にどうしたらいいのかということとは、アツシュ自身にも分からないのだ。

リシュデイルがどうしてこんな事をするのかさえ、突き止められていない。

彼に関する情報といえば、魔物の声が聞こえるという事、伝説の魔物を操っているのではないかという事、そして、人間をこの世から排除したがつている事。

アツシュがリシュデイルを追うことで、何がどうなるのかは分からない。

それでも、同じ血を分けた兄弟の、それも一卵性双生児の勘というやつだろうか。

自分が止めなければならぬという根拠のない確信。

アツシュにとって理由はそれだけで十分だった。

今アツシュ達に必要なのは情報である。

どんな些細なことでもいい。

そのためにはやはり一旦根を下ろし、

ジキアとして依頼を受けるのが一番だという結論に達した。

ついでに旅の資金稼ぎという面も同時に解決される最上策だった。

「アイウォンキーヌーほんとうーはきみーにふれたーくてー」  
キキがラジオから流れる音楽に合わせて呟くように歌っている。  
このサビの部分はアツシユにも聞き覚えがあった。  
なるほど、確かに流行っている曲のようだ。  
アツシユは欠伸をしながらそれを聴く。

「こんなあにちかくにーいーるーのーにいーららー  
でも、それだけーでーぼくーはーしあわせなーんだー」  
知らず声のボリュームが増していたのかリゼが少し身を<sup>よ</sup>振った。  
キキが歌うのを止めて目をやるが、リゼは相変わらず眠っている。  
キキはほっと吐息すると、運転席に座るジュニアへ声をかけた。

「ジュニア、あとどれくらい？」

「んー、一時間弱かな。疲れた？」

「私は座ってるだけだから大丈夫よ。ジュニアこそ」

そう言って、キキは小さな寝息に気付く。

助手席に視線をやると目を閉じたアツシユがシートに深く沈みこ  
んでいた。

「アツシユもう寝ちゃってる。」

「ふふ、寝顔だけならこんなに可愛いのに」  
「……………」

どういう意味かと内心ジュニアは思うが、  
敢えて口にはしなかった。

街が近い事を表す久しぶりの交通整理で停止して、

ジュニアも目を細めてアッシュを見やる。

「運転は慣れないから魔物退治より疲れるらしい」  
「アッシュらしい」

キキがくすくすと笑った。

ふと、ジュニアと視線がぶつかる。

「……ジュニア」

キキが呟いた。

「アイウォンキーヌー……」

先ほどの曲を口ずさみながら顔を近づけ、  
二人は軽く唇を重ねる。

「おつかれさま。もう少し頑張って」

キキの笑顔と気の利いたサービスに十分な癒しを得て、  
ジュニアは頷く。

交通整理係が合図を変えたのを確認すると、  
再びアクセルを踏み込む。  
目的の町はもうすぐである。



## 第一章 “もつと”で始まるすれ違い2

到着した町は想像していたのよりも活気に満ちていた。人通りも多く車道らしき道にも人が溢れている。

しかし基本的には貧しい町なのか、人々の着ている服や建物などは中央のそれには到底及ばない。暗がりの路地に目をやると実際の生活が垣間見られた。

「見あたらないなそのアパート。  
宿ならいくらでもあるんだけど」

徐行で走る車のハンドルを握りながらジュニアが息を吐く。窓の外をじつと見つめているアッシュも首を傾げた。

「つかしいなあ。」

ガイドブックにはこの辺の住所が書いてあんのに。

“ イーストブロック七番街2 - 8 - 14 ”

ここイーストブロック七番街だろ？」

「潰れちゃったとか？」

小さな標識に書かれた住所とガイドブックを、

交互に確認するアッシュに、キキが後ろから口を挟む。

「そのガイドブックいつのよ？」

「……一昨年。<sup>おとし</sup>ヤな予感」

「少し不便ではあるけど、

宿を借りる事も考慮しておいた方がいいな」

ハンドルを右に回しジュニアが言った。  
大通りから外れ、幾分か静かになった道を、  
相変わらずののろのろ運転で目的のアパートを探す。

アッシュ達が探しているのは、  
短期からでも貸し出してくれるアパートだった。  
全国展開しているチェーン店で、  
アッシュ達のような旅人の支持を受け大きく業績を伸ばしている  
会社である。

アッシュの持っているガイドブックによれば、  
この町には一つだけこのアパートがあるらしい。  
それを探しているのだがどうも見つからない。  
本当に潰れてしまっているとしたら最悪である。

「空き部屋の関係もあるし、早いとこ見つけないとな」  
言いながらアッシュは車の窓を開け、  
横を通りかかった老人に「すみません」と声をかけた。  
それに合わせてジュニアが車を停止させる。

「この辺に短期で借りられるアパートってないですか？」  
老人も足を止めて首を捻った。

「短期でねえ……旅人さんかね？」  
はい。“にこにこ荘”っていうアパートが、  
この辺にあるはずなんですが」

「“にこにこ荘”……」  
おお、あの面白いアパートだね」  
あ、たぶんそれです。良かった。

行き方教えてもらえます?」

笑顔でアツシュが老人に言った。  
老人はほっほつと笑うと、首を振る。

「ついこの間潰れてしもうてのう」

「って、サイアク!!」

アツシュとキキの声が八モった。  
後部座席にちょこんと座るリゼは、  
静かに動きを見守っている。

「おじさん、潰れたのっていつ?」

「三日前じゃったかな?」

あんまりあんたらのような旅人はこんな町訪れんからのう。  
宿で十分対応出来るんじやろう」

「ついてない……。」

他にそついうアパートあるわけないよなあ?」

半眼で呟くアツシュに老人はほっほつと笑い、  
深く皺の刻まれた指で後方を指し示した。

「反対側の建物がそつじゃが?」

「!?!」

四人は揃って振り返る。

と、そこには『短期から貸し出します』の看板が。

「うおーっ」

アツシユは老人を振り返り、にっこりと笑顔を返した。

「ありがとうおじさん！ 助かったよ！」

「よかったのー。ほっほっほ」

独特の笑い声が穏やかに空気を揺らす。

ゆっくり遠ざかる後姿を見送って、

アツシユは勢い良く車内を振り返った。

「んじゃ、中入ってみるか！」

老人がしばらく歩いて初めの角を曲がった所で、

また一台の車と出くわした。

そして同じように声をかけられて立ち止まる。

「すいませーん！」

この辺に “ にこここ荘 ” ってアパートないですか？

「旅人さんかい？」

「あ、はい。ガイドブックでは、

この辺の住所になってるんですけど見つからなくて……」

「今日はどうしたもんかのう、」

「こちら辺には見所も何も無いじゃろうに」

「え？」

「ほっほっほっ。」

そのアパートなら残念ながら最近潰れてしもつたんじゃ」

「え……そうなんですか……弱ったな」

旅人の少年　少なくとも老人にとっては、  
彼のような年代はどれも少年に属する　が、  
うーんと眉根を寄せる。

「おじさん、他に、  
短期から貸し出してくれるようなアパートって、  
その……」

老人は目を細めて笑う。  
まるでその言葉を待っていたかの様に、  
手を道の先に伸ばした。

「近くに一つあるんじゃ。  
その角を曲がって真っ直ぐ行けば、  
右手側に看板出とるからすぐ分かる」  
「本当ですか！　わー、良かった！  
おじさん有難うございました！」  
「いい旅をこなされ」

老人が言った。  
道を尋ねていた若者はふと、真顔になる。  
しかしすぐになっこり笑うと頷いた。

「おじさんも、お気をつけて」  
車はゆっくりと発車し、角を曲がった。  
老人もまた真っ直ぐ歩き出す。

## 第一章 “もっと”で始まるすれ違い3

「一番大きい部屋で、1LDKですわねえ」

アパートの管理人である中年の男は、  
契約書を取り出しながら言った。

「ということは、リビングが一つに部屋が二つ、  
ダイニングキッチンが一つ」

「ええ、元々2LDKだったのを、  
前の入居者に改造されてしまいました。  
リビングスペースが区切られています」

「改造って……」  
ま、住むのに問題なければいいですけど……」

どこか噛み合わない男である。

契約書に簡単に目を通したキキは、  
最後にサインを書き込み管理人に手渡す。

「支払いはどうしたら？」

「ああ、いつまでか分からないのでしたら、  
敷金だけ先に頂きますが、

あとは全て出られる時に計算します」

「そうですか。あと、火とか水とかはもう」

「すぐにでも使えますよ」

管理人は契約書に日付を書き込むとイスから立ち上がる。

触っただけで壊れてしまいそうな、

年季の入った箱から鍵の束を取り出した。

「四名様でしたよね？」

もしご入用なら簡易ベッドを二つお出ししますが？」

キキは、きよとんと管理人を見つめた。

管理人は数秒の間、

その反応の意味を考えるように黙っていたが、  
すぐに鍵の束は元の箱に戻される。

そして「いつでも言つて下さい」と笑みを返した。

キキが管理人の部屋を出ると、

アッシュ達が荷物を部屋へと運んでいるのが目に入った。  
借りた部屋は三階の一番奥である。

「まだ運ぶものある？」

キキが車を覗き込んで言う。

「お前の荷物で最後！」

「はあい」

アッシュから自らのかばんを受け取り、

キキは鼻歌を歌いつつ階段を上る。

三階の部屋の玄関まで来るとリゼがひよこつと顔を出した。

「あ、キキさん、荷物はこれだけ？」

「うん、これだけよ。」

持っていく物は最低限にしたから、  
足りないものがあれば買い足していいからね」

キキは部屋に入って自身の荷物を床に置くと、ぐるっと内装を眺める。  
少し古いがそう悪くはない。

「値段の割には中々いいじゃない」

キキの言葉にリゼも頷く。

「キッチンも十分に使えそうよ」

「もしかしてりっちゃん料理出来るの？」

キキが振り向いて言った。

近くにいたジュニアも顔を上げる。

「簡単なものなら……」

伯父さんと伯母さんが教えてくれたの。

良かったら私」

「作ってくれるの！？ 嬉しい！」

作る、と明言はしていないが、

確かにそのつもりで発した言葉だった。

跳ねるように全身で喜びを表現するキキに、

リゼはどこかほっとして頷くと、ふと、

思い出したように両手を重ね合わせた。

「そうそう、キキさん、私たちの部屋はどっちかしら？」

向こうとあっちに部屋が一つずつあるんだけど」

「“私たち”？ えーと……どっちでもいいわよ。

じゃー、近い方で、私たちこっちにするわ。いい？」

「いいわ！ じゃあ荷物入れて」



リゼが自分の荷物を手にした所でアツシユが入って来た。  
大きく息をつくと、ジュニアに声をかける。

「ジュニア、どっちの部屋にした？」

「俺たちはこっちにしたけど、いいか？」

「りょーかい」

そう言うと、アツシユは反対側の部屋へ歩いて行った。

そのやり取りを見ていたリゼが首を傾げる。

「えーと……ジュニアさん、

“そっち” じゃなくて “あっち” じゃなかった？」

「さっきキキ “こっち” って言ってたよね？」

ジュニアが言った。

リゼは首を縦に振る。

「うん、だから、ジュニアさん達は “あっち” でしょ？」

言いつつアツシユの立っている方の部屋を指差すが、  
その場にしばしの沈黙が降りる。

リゼはどういう事が分からないといったように、

当惑の表情を浮かべていたが、キキがその沈黙を破った。

「あー、もしかして、

りっちゃんの言う “私たち” って、

私とりっちゃんのことだった？」

「え……うん。……違うの？」

キキはちよつと気まずそうに笑つと首を横に振る。

「勘違いさせたみたいね、ごめん。

こつちが “私とジュニア”、

そつちが “リつちゃんとアツシュ”。

てことなんだけど……」

「！」

リゼは急に言葉を失くすと、言われた方を振り返る。

目に映つたのは、これもちよつと気まずそうなアツシュの顔だつた。

(ということとは……私、アつくと……二人……?)

途端、頭の中が真っ白になった。

全く予想もしていなかつた展開だけに、

何の心の準備も出来ていない。

(ちよちよちよつとまって！ 無理よ！ 無理だわ！

アつくと二人なんてそんなそんな)

顔を真っ赤に染めてリゼはその場から動けなくなっていた。

アツシュは暫く様子を見守っていたが、

埒があかないと見て取つてリゼに歩み寄る。

リゼがはつと身を強張らせた。

「ごめん、前もつて言つとけば良かったね」

リゼが不自然に首を縦に振る。

アツシュはリゼの手から荷物を取り 「こつち」 と促し寢室に

入った。

後ろ手に扉を閉めるとそのまま真っ直ぐ奥に歩いて行き、窓を開ける。

「開けると気持ちいい、南向きかな」

リゼはまた無言で頷いた。

立ち尽くしたままどうしたらいいか分からなかった。

アッシュは一つしかないベッドに仰向けに倒れ込んで、

リゼにも座るよう促す。

あまりにアッシュが軽い雰囲気醸し出しているためか、リゼは幾分かほっとしてアッシュの隣に座った。

「実を言うと、最初は男女で分けようかとも思ったんだ。

リつちゃん初めて一緒に暮らすし……でも、

ジュニアとキキはずっと一緒に部屋だから、ていうか、

あいつらは一緒に部屋でもう自然だから、

分ける方が変な感じ。見てて分かるだろ？」

「う、うん……」

「まあそれが一番の理由だけど、あとは俺たちの仕事柄、魔物が紛れ込む可能性があることも理由の一つ。

つまり安全対策」

それを聞いて、リゼは納得がいく。

「……そっか」と溜息と共に呟いた。

（そんな風にいっぱい考えてくれてたんだ。

なのに私つたら……）

「リつちゃん？」

「ん、分かった。ありがとうアつくん」

リゼが笑顔を見せたので、アツシユもつられて微笑んだ。そして立ち上がると、部屋の中を見回す。

「リつちゃん欲しいものある？」

「え？ 欲しいもの、って？」

「例えば、着替える場所とか」

「！ そっいえば……」

よく考えてみればもともと一人用の部屋である。色々な不便がそこには存在する。

「ここに布でも張ろうか？」

鏡あるし、ちょうどいいかも。どう？」

「うん、ありがとう」

「それから……ベッドだけど」

アツシユはリゼに振り返った。

リゼは少し顔を赤くして、俯く。

心臓が飛び出そうなくらい高鳴っている。

確かに自分たちは世間でいうところの“恋人”ではある。

しかしリゼには心の準備が出来ていない。

焦りはどんどん加速する。

(どうしようベッド一つしかないのよね、ソファだっじゃないし、

ていうかアつくんがソファでっっていうのも申し訳ないわ……でも、

一緒に寝るなんて “寝る”！？ きゃー！ 無理よ！

私だってそのその、それくらい分かってるもの！ どうしよう！(

「りっちゃん」

「はいい！」

「大丈夫？」

「え、あ、は、はい……」

アツシユは微笑んでベッドを指差す。

「りっちゃん使っていいよ」

「え？ ……でも、アツくん……」

思いがけない言葉にリゼは気の抜けた表情でアツシユに振り返る。

「普通、宿みたいな所には簡易ベッドとか用意してあるから、管理人に言えばなんとかなるよ。」

他にこうして欲しいとかある？」

「えと……あの……ない、です」

「何かあったらいつでも言って。オーケー？」

顔を覗き込まれ、リゼは頷くしかない。

アツシユはにこにこことリゼの頭を撫でると、

「他の荷物解き手伝ってくる」と言って部屋を出て行った。残されたりゼは暫く扉を見つめてぼかんとする。

先ほどの優しさはきつと、

アツシユの思いやりなのだろうとリゼは思う。

何だか嬉しいような少し寂しいような、

そんな不思議な気持ちがしていた。

正直なところ、

リゼにはあまり恋人同士である大半のことは経験がなかった。

アルバと付き合っていた頃も、キスをしたのは一回だけ。  
しかもちょうどアッシュがリゼの店に初めて来たあの日だ。  
今思えばアルバとしたことはこれだけかもしれないと、リゼは思  
う。  
手を繋いだり、デートをしたり、それさえも記憶にないのだ。

(分かってはいるけど、結構悲しいものね……)

アルバに対する気持ちは全くと言っていいほど残ってはいないが、  
どんな人にも拒絶されるといふのはつらいものである。

ふと、リゼはアッシュとのことに考えが及ぶ。

アッシュとは本当にまだ始まったばかりなので、

何も焦ることはないのだが、

アルバと付き合っていた頃との気持ちとは大分違う気がしていた。

何が違うのかと聞かれればよくは分からないのだが。

(アっくん、優しいなあ……)

そんな風に思ってみる。

実際感じていることだ。

(でも、もっと……)

もっと……

もっと？

(私なに、考えてんだろ！)

思ってもみなかった事を考えそうになって、

リゼは慌てて思考回路を遮断する。

そして軽く吐息した。

アツシユを想う時、リゼの心は温かく、とても満たされた気持ちになる。

思わず笑みが零れてしまうほどもう心はアツシユでいっぱいなのだ。

何も考えなくていいくらいに。

どんなにつらい過去も帳消しに出来てしまうかのようだ。

(しあわせだな……)

リゼは微笑んでいた。

そして分かっている。

アツシユだけではない、キキもジュニアも、精一杯自分に対して心をかけてくれている。

だからこそ、こんなにも心穏やかで、幸せを感じることが出来ているのだ。

どうやってそれに答えられるのか、

リゼはずっとそれを考えていた。

一番なのは、きつと笑っていること。

皆と、そしてアツシユといてこんなにも幸せなのだ、

口にしなくても伝わるくらい笑顔でいたいとリゼは思うのだ。

「リつちゃん！ いい？」

部屋の扉がノックされ、外からはキキの声。

「あ、うん！ ごめんなさい今」

扉が開き、キキがリゼを見つけるなり言った。

「来て来て！ コーヒー飲も！」

「うん、ってあッ！」

言い終わらないうちに腕を引かれ、キキに連れ去られた。  
幸せは、こんなにも溢れている。



## 第一章 “もつと”で始まるすれ違い4

他の荷物解きを手伝うと言って部屋を後にしたアツシユは、扉を閉めて三秒後、大きく大きくため息を吐いた。

ちようどそこまで多くもないキッチン道具を解いていたキキとジ

ユニアが、

それを聞きつけアツシユを振り返る。

「なあにい、そんな飛ぶ鳥も落とすようなため息は！」

「その表現はどうかと思うけど……」

ほっとしてくれ。俺は悩んでるんだ」

「めずらしい」

「あれをどう捉えたらいいのか……」

よく分かんねえ……」

アツシユは心なしかふらふらとした重い足取りで、ダイニングのイスに座った。

そして片手で頬杖を付くと、又嘆息する。

キキが興味津々といったようにアツシユを覗き込んだ。

「ね、リッチちゃんアツシユと一緒にの部屋で、

結構困ってたんじゃないの？ そのこと??」

「ったく、こつという事には特に鋭いよな、おまえ」

楽しそうに跳ねると、キキもイスに座った。

「なにがあつたの？ 聞いてあげる」

「キキ……」

ジュニアがリゼを気遣ってか少し諫めるように声をかけた。  
しかし珍しくアツシュが話し出したので、それ以上は何も言わず  
に、

ジュニア自身も耳を傾けながら荷物の片づけを続けた。

「結局予備ベッド並べることにしたんだけど……」

正直俺としては想像以上なんだよな、あの反応は……」

あれが普通だっけ？ そんなもん？ そうだったか？」

何と比べているのかアツシュは自問口調で呟く。

「あはは！ 残念でしたーって感じ？」

りっちゃんあり得ないくらい純粹なものね。

距離を縮めるには時間かかりそうねえ

でもアツシュが珍しいじゃない、付き合い方で悩むなんて。

いつもなら自由にやってるのに」

「りっちゃんに出来るか！ 前は何ていうか、んー、

……………とにかく！

りっちゃんに関しては俺、

かなり気つかってるような気がしないでもないんだけど……」

……………ドウ思ウ？」

不本意そうにアツシュがキキに尋ねた。

キキは益々面白そうに目を輝かせる。

「そうねえ、うん、そう思うわ！

でもそんなものなんじゃない？ 恋って！」

「……………ッ！？」

「かーわいーアツシュ！ 顔赤くなってるー

恋、それはー、恋っ」

「るせえ、ほつとけ！」

あー調子狂うな！ 外行ってくる！」

アツシュが本当に困った顔で立ち上がった。

ジュニアも少し微笑んでいる。

キキはアツシュの後ろ姿に向かって声をかけた。

「あ、じゃついでに買い物頼んでいい？」

「どーぞっ」

アツシュは扉に手をかけながら投げやりに返す。

アツシュの脳裏にはキキの言った“恋”という言葉がずっと巡っていた。

これまで色んな女性と付き合ってきたのが嘘の様な感じさえる。

恋愛はこんなにも難しかっただろうか？

「行ってらっしゃーい」

キキに見送られてアツシュが出かけると、

こっそり大まかな片付けを終えたジュニアが、

やかんを火にかけている所だった。

「キキ、リつちゃん呼んで一緒に休憩しよう。」

「コーヒー入れるから」

「わ、ありがと！ 今呼んでくるわね」

キキは足取り軽く、リゼの部屋をノックする。

ジュニアはそれを見つめながら、やれやれといったように微笑み、

三人分のコーヒーカップをテーブルに並べた。

## 第二章 “想い” が犯す嘘と罪 1

### 第二章 “想い” が犯す嘘と罪

日もすっかり暮れた午後七時前。

街の至る所でネオンが煌めき始めた。

殆どの商店がそれと入れ替わるように店終いを始めている。

そんな中のある店の裏口に、店の主人と子供らしき影が、

店から漏れる明かりに照らし出されていた。

「今日の分だ」

主人がぶつきらばうに少年の手へ何かを渡した。

ちやり、と金属に似た音がする。

「……………」

少年は掌に転がるコインに目をやってから、

また無言で主人を見上げた。

主人は少年の視線に気が付き、眉を吊り上げる。

「なんだ？ 不満でもあるのか！？」

そんな目で見ると！ さっさと行け！」

「少なすぎるよ」

少年は主人を見つめたまま動かない。

実際、仕事量に見合わないほど少ない給料だったのだ。

これでは一人分のパンを買うので精一杯だ。

話にならない。

「おら、帰れ！ 邪魔だ邪魔だ！

こっちは人手ならいくらでもあるんだ、

明日からもう来るな！！」

「！」

体を突き飛ばされ、少年は地面に倒れこんだ。

主人はそのまま勢い良くドアを閉めてしまった。

すぐさま内鍵の閉まる音が聞こえる。

「くそっ！ しんじまえ！！」

少年は出来る限り罵って立ち上がる。

貰ったばかりのコインをポケットにしまうと、

路地を通って大通りに出た。

人通りは多く雑多とした感じた。

少年はその人波の中へ潜り込み、視線を動かす。

獲物は簡単に見つかった

仕事帰りという雰囲気かもを醸し出す、  
注意散漫な女性だ。

今日についていると思いつつ、そつとハンドバッグの中を覗くと、

手が届きそうな位置に財布が見えた。

後ろにくつついたまま機会を伺う。

ふと、女性が歩く速度を緩めた。

（今だ！）

素早く財布を抜き取るうと腕を伸ばす。

が、僅かな所で何者かに腕を捕まれた。

少年がハツと振り返ると、  
一人の若い男が身を屈めてこちらを見ていた。

(しまっ)

「よくないぜ少年。こんな」

「うるさいっ！ 離せ！」

少年が腕を振り払おうと必死にもがくが、  
若い男の外見からは想像も出来ない、  
ものすごい力で握られていてびくともしない。  
少年は男を睨むと、更に喚き散らした。

「誰だよあんた！ 離せよ！ はーなーせーっ！」

周りの人間も何事かと二人を取り囲み始めていた。  
少年は奥歯を噛み締める。

「おれは何にもしてないだろ！ 調べたいんなら調べるよ！」

「わーかってるって。注意してやるだけだ。」

あのな、そんな技術でスリやつたって捕まるだけだぞ。  
今後気をつけるよ」

「うるさいッ！」

少年はがぶつと、力の限り男の手に噛み付いた。

「だーーーーッッ！！」

男の手が離れた際に全速力で逃げ出す。  
そのまま人込みへと消えた。

噛み付かれた男は出血こそしなかったものの、  
くつきりと齒型の残る自分の手を見つめ涙目で唸る。

「つてーなあ……あのガキ……！」  
「あの……」

ずっと様子を見守っていたのか、  
スリの被害に遭いそうになっていた女性が男に話しかけた。  
男が振り返ると、女性は少し顔を赤くする。

「あの、ありがとうございます……」  
何か私ぼーっとして……

「あ、手、大丈夫ですか？」

「大丈夫です。これからは気をつけた方がいいですよ。  
ここら辺は治安もあまり良くないみたいだから」

そう言っつて男がその端正な顔を和らげ、笑顔を作った。  
深い青色の瞳が細められる。

背は女性よりも頭一つ分高く、全体的に痩せている感じがだ。  
ふと、微風が男の染色された髪を揺らし、  
左耳に輝くシルバーのピアスを覗かせた。

男はじつと向けられる視線に気付いて不思議そうに見つめ返す。  
女性はますます顔を赤くすると、言いくそくに口を開いた。

「あのお、お名前を聞いても……？」

「アッシュ」

「アッシュ？ どこかで聞いたような……」  
どこだったかな？」

「よくある名前ですから。あなたは？」

「私の名前？ 私は……えーと……」

女性は少し考えたかのように見えたが、おずおずと答える。

「ジ、ジュリエットです」

「……お姫様みたいな名前だね？」

「いえ！」

女性はとんでもないと言ったように首を振り、  
また俯うつむいたままぼつり零した。

「あろう……」

「？」

女性はやはり恥ずかしそうに顔を赤くしていたが、  
突如決心をしたようにふっと顔をあげる。

「あの！ もし良かったら！ 時間があればいいんです！  
駄目なら駄目で言ってお下さっていいんですが、  
出来れば少しだけ！ 本当に少しでいいんです！  
どうか少し私に付き合っ頂けませんかっ！？  
お願いしますお願いしますお願いします！！」

言い終わって肩で息をしている女性の勢いに押された格好で、  
アッシュは「はい……」と頷いていた。

それを聞いた女性はほっとしたように笑顔になると、  
また申し訳なさそうに礼を言う。

アッシュは少しリゼの顔を思い浮かべたが、  
この程度では怒らないだろうと結論を出す。  
しかもこの女性、何か訳ありな様子でもある。



(少しって言うてるし、まあいいか……)

そうして二人はとりあえず、

一番近くにあったファミリーストランに入ることにした。

この先に待ち受けている結末を、アッシュはまだ知らずに。

## 第二章 “想い” が犯す嘘と罪2

大通りからまた路地に入り、息を切らせて振り返る。  
どうやら誰も追ってこない。

少年ロナはふうつと息を吐くと、また一つ路地に入り込んだ。  
少しだけ広い通りに入る。

明かりの消えた店をいくつか通り過ぎ、

ロナはふと、ある店の前で立ち止まった。

そこにはまだ明かりがあった。

ガラス張りのショーウィンドウに手をかけ、

中をじつと見つめる。

残り少なくなつたケーキが目の前に並んでいる。

すると、カランカランという音と共に店から人が出て来た。

母親と娘らしき二人連れ。

娘はまだ幼く、なぜかふくれっ面をしていた。

「ママのバカ！ あたしもっとおおきのがほしかったのに！」

「しょうがないでしょ。もうこれしか残ってなかったんだもの。

我慢しなさい」

「いやだあ！ きょうあたしのおたんじょーびなのに！」

ぜんぶママのせいだもん！

ママがおそくなつたからあたしのケーキなくなっちゃったんだ！」

「もう、この子は……！」

母親はその場を離れようとしないう娘の手を強引に掴んだ。

娘は力の限り抵抗する。

「いやだあ！ いやだあ！ もっとおおきいケーキがいーっ！！」

母親は駄々をこねる娘に手を焼いていたかと思うと、とうとうその手を振り払った。

「じゃあ勝手にしなさい！」

「っ！」

そう言い捨て、母親は一人で歩き去って行く。  
少女はすぐに泣き出した。

「うわぁーん！ ママなんてだいつきらーい！」

母親の気を引くためか大声で泣き続けるが、  
母親は振り向かなかつた。

かなりの距離があいて、さすがに心細くなったのだろう、

「まってえー」 と少女の方が母親を追いかける。

ロナにはもう暗くてよく見えなかつたが、  
少女は果たして母親に追いついたのだろうか？

暗闇に目をやったまま何となく吐息をした、その時、  
また店のドアが開き店の主人らしき中年の男が顔を出した。

「もう店終いだよ。何か買うのかい？」

ぶっきらぼうだが感じの悪くない主人だとロナは思う。

もう一度ケーキに目をやり、  
ポケットから先ほどもらったばかりのお金を全部手のひらに掴んだ。

取り出して見てみるが、ケーキはとても買えそうにない。

ロナは主人に向かって静かに首を振る。

主人は無言でまた店に戻って行った。

ロナはその店を離れると、そこからそれほど離れていない場所にあるパン屋へ足を踏み入れた。

先ほどのケーキ屋よりもかわいらしい鐘の音が鳴る。

「いらっしやいませー……」

店のおかみさんはロナの姿をちらと見ると、無言で立ち上がる。

ロナは真っ直ぐに歩いて行き、一番安いパンを指差した。

そしてポケットからお金を全て取り出しカウンターに転がす。

同時にパンを一つ受け取ると、踵かかとを返し足早に店を出た。

これがいつものやり取り、滞在時間は三十秒。

それでもロナのような者を入れてくれるだけ心の広い店なのだ。

ロナは買ったばかりのパンをしっかりと握り、来た道を戻る。

今度は明かりの消えた先ほどのケーキ屋で再度立ち止まると辺りを見回す。

そして店の横の狭い隙間を見つけ、

そこに体を滑り込ませなんとか店の裏へ出る。

思惑通り、一日のゴミがいくつか積んであった。

ロナはその中の一つのゴミ袋を開けると、

中に手をつっこみ漁り始めた。

暗くて殆ど見えなかったが、幸いにも目的の物はすぐに見つかった。

「あった」

取り出してそれだと確認する。

小さなロウソク。  
簡単に手で汚れを取ると素早くポケットに納め、また歩き出した。  
いくつか路地を抜けると、  
今度はネオンがひしめき合う夜の街へと出た。  
ここにロナのような少年は不釣り合いだったが、  
構わず通りを真つ直ぐ歩く。  
するとすぐに籠かごを持って客引きをする若い女性を見つけ、  
駆け寄った。

「それくれ！」

「はあ？」

手を出してみるがそっぽを向かれ相手にされない。

ロナはちえ、と軽く舌打ちすると、

隙を見て客引きの籠の中から宣伝用のマッチ箱を一つかつさらった。  
た。

そのまま走り去る。

どれくらい歩いたのか、

いつの間にか人通りも全くない薄暗い路地にいた。

そしてある廃墟はいきょと化したガレージ倉庫の様な建物へ入って行く。

「ようロナ！」

そこに暮らす仲間の一人が声をかけた。

ロナは手を挙げただけで返し、足早に二階へと続く階段を上る。

二階の隅にある隙間を覗くと、小さな少女が横になっていた。

すぐにロナを見つけ起き上がる。

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

「ただいま」

ロナは少女の顔を見て、はじめて笑顔をこぼす。  
少女と並んで座った。

「お兄ちゃん、今日はどうして遅かったの？  
ちょっとしんぱいしたよ……」

「ごめんなサニー。でもほら、」

そう言っただけでロナは買ってきたパンを取り出した。

「まだ食ってないだろ？　ちょっと目閉じてて」

「目？　なんで？」

「いいからほら！」

促され目を閉じる。

それを確認したロナがポケットからロウソクとマッチを取り出し、  
がさごそと何かを始めた。

間もなく「もういいよ」という声にサニーがゆっくりと目を  
開けると、

目の前にはロウソクの刺さったいつものパンがあった。  
頂点には暖かく小さな火が揺らめいている。

「わあ！　きれいー！」

サニーが両手を合わせて歓声を上げた。

ロナは満足そうに妹の嬉しそうな顔を眺めやり、  
そっと口を開いた。

「はっぴばーすでートウーユ　　はっぴばーすでートウーユ」

あ、と驚いたようにサニーが目を輝かせる。そう、今日はサニーの六才の誕生日なのだ。眩くような歌声がサニーの表情をくすぐる。時々わざと節を外すロナに笑い声を上げて、サニーは歌が終わると同時にロウソクを吹き消した。

「おめでとうサニー」

「お兄ちゃんこれどうしたの？　びっくりしちゃった！」

サニーの言う“これ”とは、ロウソクのことだろうか？

ロナはにっと笑うだけでそれには答えず、

ロウソクと少し垂れてしまった蠟ろうそくを取り除いたパンをサニーに渡した。

「ほら。ケーキじゃなくて悪いけど」

「ううん、わたしこれ大好き。」

「……でも、お兄ちゃんは？」

「おれ？」

サニーの大きくて丸い瞳がじっとロナを見つめている。

「えーと……ごめん！　あまりにお腹すいて先に食べちゃった！」

サニー待たせといて悪いかなとは思ったんだけど……えへへ」

「……ほんと？」

「だからごめんって！」

次からはちゃんと一緒に食べような！　フライングしないから！」  
「……じゃあ、わかった」

サニーが微笑んだ。

ロナはほつと息を吐く。  
もちろん、ロナはこの日何も食べていない。  
いつもなら一つのパンを二人で分けて食べている。  
時折もう少し栄養価の高い物が手に入ったりもするが、  
最近の稼ぎではパンを一つ買うので精一杯だった。  
今はまだ秋の初めて気温も暖かく過ごし易いと言える。  
しかしすぐに厳しい冬がやってくる。

(そろそろ暖かい物、集めて来ないと……)

そして食事もなんとかしなければ、  
今のままでは容易に風邪を引いてしまう。  
そう、彼らにとつて怖い事の一つは、病気に罹ることなのだ。  
すると、隣でサニーがこほこほと小さく咳き込んだ。

「大丈夫か？ 風邪引いたんじゃない？」

タイミングの良さにロナは一瞬どきつとす。  
が、サニーは笑いながら首を振った。

「ううん、パンがのどにつまっちゃった」

「ああ、なんだ……ゆっくり食べるよ」  
「うん」

ロナはほつと胸を撫で下ろす。

とにかく、早めにこの状況を打開しなければならぬ。  
そのためには新しく、しかも今より稼ぎのいい仕事を探さなければならぬ。

(そんないい話、あるわけないよな……)



こんなたかだか十歳の子どもを、  
ましてストリートで暮らす最下層の人間を雇ってくれる所など無  
いに等しい。

ただでさえ人々が職に困っている時代なのだ。

ロナは幸せそうにパンをかじるサニーをじっと見つめる。

何よりも大切なたった一人の妹。

誕生日だというのにケーキの一つも買ってやれない。

おいしい食べ物も、プレゼントも、何も用意してやれない。

たった一年前だ。

一年前のサニーの誕生日、ロナもサニーも暖かい部屋にいた。  
テーブルの上には豪華とは言えないが沢山のご馳走が並び、  
そしてプレゼントも用意されていた。

(そっぴや特製スープ、あつたっけなあ)

何かを思い出して、ロナが笑った。

作りたての特製スープはサニーの好物だった。

熱いからゆっくり食べると言ったにも関わらず、

サニーはスープを一口飲んですぐに舌をやけどした。

あつい、と叫ぶサニーに、困った顔で駆け寄る母が

(母さん)

ふと、ロナの表情が曇る。

一年前のサニーの誕生日と一番違うのは。

駆け寄った母はすぐに持ってきた水をサニーに飲ませてやった。

必死に飲み込むサニーを、優しく見つめる瞳。  
今年はまだ、何も無い。

「こほっこほっ！」

またサニーが咳き込んだ。

ロナが背中を撫でてやる。

「ゆっくり食べるって言っただろー」

「えへへ」

サニーの癖は今も変わらない。

ただ、優しく見つめるあの瞳だけがここにはない。

ロナは幼い妹を自分が何とかして守らなければいけないと、  
ただひたすらその想いのみで生きてきた。

何が無くてももういい。

妹さえ笑っていてくれたなら。

「ごちそうさま。」

お兄ちゃん、今日のパンはいつもと違ったよ」

「え？ おまえ、まさかカビ生えてたとかじゃ……」

早く言えよそついうことはっ！」

(腹でも壊したらどうするんだ！)

青ざめて言うロナの顔を見ていたサニーが、にっこりと笑った。

「お兄ちゃんの、とくべつな味がしたよ。」

とってもおいしかった！ ありがとう！」

「！」

やられた、という思いでロナは全身の力が抜けるのを感じた。環境が変わっても無垢な心だけは変わらない、愛しい妹。

「そりゃ、良かった。」

おにーちゃんのツバつけといたからな」

「えー？ やだー！」

「いひひ」

ひとしきりじゃれあつて、二人は笑い転げる。

無機質な空間に花が咲いたかのような笑い声が響いた。

ロナは呼吸を整えるために一つ息を吐く。

「もう寝ようか、サニー」

「うん」

一枚の布を二人で被る。

この布もゴミ置き場から拾ってきたものだ。

サニーはロナにくつついて目を閉じた。

「サニー、明日は一緒に靴磨き行こう」

「え？ 一緒にいいの？」

「うん。また別の仕事見つけるまで、一緒にやる」

「お兄ちゃんといっしょ、うれしいな……」

「ん……」

そう言つて、サニーは眠りに落ちる。

いつもより遅い時間なので眠たかったのだらう。

ロナも欠伸あくびをして目を閉じた。

すぐに、規則正しい呼吸が二つ、夜の闇に落ちていった。

## 第二章 “想い” が犯す嘘と罪<sub>3</sub>

人間誰しも間違いはある。

若いと特にその場の “衝動” は抑えられないことが多い。

「うっうっうっ……あーん」

「泣くなって……」

アツシユはまた、ジュリエットの頭をぼんぼんと撫でた。

確かに見ず知らずの女性に対してすることではなかったにしても、こんなに傷付くとは思っていなかった。

明らかにアツシユの身勝手さが招いた結果だった。

「だってっ、初めてだから……私っ……うわーんっ」

「俺が悪かったよ。もう泣くな」

正直、リゼとの事で気持ちが落ちつかなかったせいかもしれない。勢いだからと言ってやはりとどまるべきだったのだ。

投げやりな気持ちでジュリエットに接するのはいつものアツシユらしくなかった。

しかし発生してしまっってはもう取り返しはつかない。今になって襲ってきた猛烈な後悔も空しいだけだ。

魔術のおかげか、ジュリエットが少し落ち着きを取り戻したのを見て、

ほっと息を吐く。

アツシユはジュリエットから手を離れた。

「すみません、取り乱してしまって……でも、悪いのは私です。」

ひつく……あなたを引き止めてしまった私がほんとは一番悪いんですっ……うっ……っ

……でも何となくあなたなら、って……私今までこんなことなかったから……でも、

間違つてなかった！ すごく嬉しいんですっ！」

「……そう言ってもらえると俺も救われる……」

アッシュは複雑な気持ちで呟く。

その言葉でいくらかこのジュリエットとの時間に意味を感じるこ  
とが出来た。

アッシュは彼女を覗き込み、

今自分に出来る精一杯のやさしい笑顔を向けてやる。

窓から見える景色はまだ薄暗さを残しているものの、

夜明けが近いことをはっきりと感じさせた。

(もう朝になるのか……)

アッシュはこっそりため息を吐かざるを得ない。

まさかこんなことになるとは思ってもみなかったのだ。

今思えば、もしかしたらいくらでも理由を作って、

その場を去ることだって出来たかもしれないのに。

どんな顔をして帰ればいいのか微かな不安が胸を過った。

頭がくらくらするのも気のせいではないだろう。

それから間もなくしてアッシュはジュリエットと別れ、帰途に着

く。

ジュリエットが気持ちよく手を振るのとは裏腹に、

アッシュは身も心も当然、重々しいことこの上なく。

夜明けはすぐにやってきた。

一番に起きてきたリゼはリビングのドアが開いているのを見つけ、慌てて中を覗く。

すると案の定、アッシュがソファで死んだように眠っていた。それを発見してほっとしたように微笑む。

昨夜、いつまでも帰って来ないアッシュを心配して遅くまで待っていたが、

うとうとし始めたリゼをキキが大丈夫だからと寝室に促した。

それから不安ではあったが何とか眠りについたのだった。

リゼはアッシュの傍に行き、そっとソファへ座り込む。相当疲れているのかぴくりともしない。

(寝顔かわいいな)

ふふと笑って、またじつとアッシュの顔を見つめた。

(いったいいつ帰って来たんだろう……?)

自分が寝てしまっただけでよかったら、とリゼは少し後悔する。もう少し頑張って待っていてあげれば良かったと。

「……アつくん」



アツシユの表情は窺えないが、無言のままだ。リゼは顔を真っ赤に染めてきゅっと目を閉じた。心臓が口から飛び出てきそうな気がした。全くどうしていいのか分からない。暫くそのままだったが、思い切って口を開いてみる。

「あのっ……アツくん……？」  
「……………」

やはり返事はない。その代わり、アツシユの手がリゼの髪を少し撫でる。リゼは堪らなくなって自由になる両手で顔を覆った。一体アツシユはどういうつもりなのか。真剣な眼差しを想像してみる。

「あの、アツくん……その……えっと……えっと……」

必死に言葉を探してみるが上手く口に出れない。困り果ててしまったところへ、タイミング良く起きて来たキキが何故か勢い良くリビングに顔を出した。

「アツシユね！？ 起きなさいッ！」  
「キキさ」

助かった、と、リゼがキキに視線を向け、無言の合図を送った。しかし。



「っと、ごめんなさい、お邪魔しました。」

気まずそうに去って行くこととするキキに、リゼは思わず叫んでいた。

「待ってキキさん！ イヤ~~~~！」

起き上がろうとしたがすごい力だ。  
必死にキキへ視線を投げる。  
限界だった。

## 第二章 “想い” が犯す嘘と罪4

リゼの涙目にキキが二人の所へ戻って来ると、  
ふう、とため息を吐く。

「こいつ……また寝惚ねぼけてんのね？  
まったく！」

「ええ！？ これッ！？」

リゼが目には涙を浮かべたまま声を上げた。  
キキは頷くとちょっと待っていて、  
と言つて一旦姿を消したが、間もなく戻って来る。

「こつこつ時ちよつとやそつとじゃ起きないからな。  
アツシュの目覚まし対策兵器その一！！」

にやり、と笑つて、  
キキはその手に持っていたものをアツシュの顔に転がした。  
リゼの目にちらつと映つたそれは、  
手のひらサイズの、わた？

「 “ 噛み付き魔物ピグモ ” …… !! GO!! 」  
キキの掛け声に反応した “ ピグモ ” が、  
がばつと口を開ける。

「 がうーうーうー 」

そのままアツシュの顔に噛み付いた。

「つつ！」

アツシュが反応を示す。

そして反射的に両手で“ピグモ”を払い除けた。  
その隙にリゼが身を起こす。

「な、なにこれ……？」

「ていうかまだ起きないなんて、

ふ、流石ねアツシュ。……でも」

そう言っただけで投げ飛ばされた“ピグモ”に視線をやると、  
目の錯覚ではない、いつの間にか二体に増えている。

「あまーい！！」

この“ピグモ”は衝撃を受けると分裂するのよ！！」

おほほほほっ！ と高笑いするキキの横で、  
リゼは呆然とその様子を見つめる。

増えた“ピグモ”は勢い良くアツシュに襲いかかった。

「がうー……！！」

「がうー……！！」

「だー……！！」

悲鳴を上げてアツシュが飛び起きた。

何事かと痛みの走った両手を持ち上げると、  
しっかりと腕に噛み付いた白い物体。

アツシュは寝不足で重たい眼をこじ開けそれを見つめた。

「キキキてめえ……分かった、毎回毎回俺が悪い。それは謝る。」

でもな、無意識の俺にこんな罰を食らうような罪は、まっつったくないはずだぞ!? いてえんだよっ!!

言いつつ “ピグモ” を魔術で取り除くと、

アッシュは血の滲む咬み跡へも簡単に癒しを施しておく。そういえば昨日の少年といい、噛み付かれてばかりだ。うんざりするアッシュに、しかしキキはふんと鼻を鳴らす。

「あーら、そうかしら?

その “ピグモ” でも罰は足りなくらいよ!!

「? 何が言いたいんだよ。俺が何したって」

言い返そうとしたアッシュをキキの鋭い視線が阻む。

「白を切るつもり? 昨晚、どこ行ってたの?」

アッシュが表情を凍りつかせた。

ふ、とキキが嘲笑を洩らす。

「りっちゃんが昨日ずっとアッシュの帰りを待ってたなんてこと、知らないだろうから言っておくけど。」

それでも出来るものなら言い訳を必死で考えることね!

私の言いたいことはそれだよ。

りっちゃんを悲しませることがあったら……分かってるわよね……

……?

殺気を感じ、アッシュは思わず身を震わせた。

そのままキキが去って行く。

とりあえずほっと息をついたものの、ここからが修羅場だ。

(怒ってるかな？ ……いや、泣いてたりして)

そんな風に色々想像しながら恐る恐るリゼを振り返った。  
ところが。

リゼと視線が合うと、リゼが困った様に微笑んだのだ。  
まるで他人事のようにさえ思える。

アツシユは気が抜けたように細く息を吐くと、  
少し俯うつむいた。

「えーと……その、昨日はごめん……」

ちよつと予定外のこと起きて……何ていうか、うーん、

“人助け”？ ていうか……」

自分でも意外な程しどろもどろにしか言葉が出て来ない。  
アツシユは更に焦って続ける。

「や、これは本当に言い訳なんかじゃなくて、  
街歩いてたらスリ見つけてさ、  
それがきっかけてその被害に遭いそうになってた人と話して、  
それからずっと“朝まで”付き合って う！」

突然アツシユが言葉を切った。  
沈黙が降りる。

(朝までなんて言うんじゃない！！)

正直過ぎた自分を呪うが、リゼの表情に変わりはない。  
それが余計に不安を掻かき立てた。

「しょうがなかったんだ。  
何かとてつもなく困ってる人だったから断れなくて……  
うーんと、リっちゃん怒るかなーって少し思っただけど  
う  
！！」

また、言葉を切る。

(んなこと言ったら相手が女だってバレるだろー！？ 俺のあほ！)  
焦りすぎて言葉を見失ったアツシユは、  
視線だけはリゼから離せずにとだらだと冷や汗を流していた。  
リゼは何を思うのか、  
やはり元の表情のままアツシユの言葉を待っている。  
沈黙が続いた。

(俺、一体どうしたいんだ？  
もう正直に言ってしまったばいいのか？  
でも、そんな事したらリっちゃんどんな反応するか……  
こ、怖い……！)

リゼは怒らない、ということ、アツシユは知っていた。  
だがどうしても本当の事は言いたくない。  
いや、言えない。

何がセーフで何がアウトか？  
アツシユの中にある判断基準ではもう何も測れないのだ。  
そこにどんな正当な理由が存在していたとしても、  
リゼの基準に合わせなければいつ失ってしまうかも分からない。  
それがひたすらに怖かった。

今更ながら自分の行動に心の底から後悔を覚えるもすでに遅し。

アツシユは心を決めて、口を開いた。

「口、 “ロミオ” っていう男の人！」

その人の “身の上話” ずっと聞いてたんだ！

場所はなんとかパレスっていう “ファミリーレストラン” で  
「！」

およそ五秒間の、沈黙。

すると、リゼが思いがけず笑った。

しかし安堵など出来る余裕はない。

今のアツシユにはそれが “セーフ” を意味するのか、  
“アウト” を意味するのかも分からなくなっていた。

必死で笑顔の意味を探る。

(無理矢理だったか!?)

でもジュリエットがありなんだから、ロミオが無いわけない!

そんなアツシユをなぜか嬉しそうに見つめたまま、

リゼは声を出して笑っていた。

「ロミオって、王子様みたいな名前ね。」

そっか、その人もアツくんに見つけてもらったのね。

アツくんはきつとそういう人と出会う力があるのよ。

私がよく知ってるもの。

ロミオさん、元気になったかしら?」

「う……うん、かなり……」

これは本当だ。

「良かった!」

無垢な笑顔にきりきりと心が痛んだ。

リゼは自分とは違って嘘偽りのない瞳をしている。

アツシユは自分の犯した嘘の 罪の大きさを知る。

「リつちゃん、その、ごめん……」

いくら謝っても消える事のない罪悪感。

それは当然受けるべき罰なのだと言っていた。

「もういいの。元々ただ心配だったただだから……」

何もなくて良かった、無事で……良かった。

アツくんが急にいなくなると、どうしても不安になってしまっ  
か  
ら……」

リゼが薄く微笑んだまま視線を落とした。

アツシユは奥歯を噛み締める。

「もう心配させたりしないようにするよ……本当にごめん」

アツシユの真剣な表情を見て、

リゼが嬉しそうに笑顔を見せた。

また、アツシユの心が悲鳴を上げる。

リゼの笑顔を失いたくない。

最初で最後にするから、リゼだけは失いたくない。

そのためならどんな罰もその身に受ける覚悟で。

ただその一念で、

この秘密だけは隠し通そうとアツシユは心に誓ったのだった。



### 第三章 “優しさ”の持つ恣意と鋭1

#### 第三章 “優しさ”の持つ恣意と鋭

ありふれた宿の、ある一室に、  
柔らかい朝日が差し込んでいる。  
久しぶりに感じたその眩しい感覚が、  
心地の良い眠りの中にある意識を突如現実へと引き上げた。  
はっと目を開け飛び起きると、  
慌てて近くの目覚まし時計を手に取り、  
目の前の現実を凝視する。

「ツキやあああああああああ！……！！  
寝過ごしたツツ！！！！」

\*\*\*

確実に宿中に響き渡ったであろう甲高い悲鳴と、  
続けて発生するどたんばたんという大きな騒音にも眉一つ動かさ

ず、

ソファにゆったりと座ってブラックコーヒーを口に含んだ。  
切れ長の綺麗な瞳がじっとテーブルに広げられた新聞に注がれて  
いる。

これは彼の日課だった。

「銀行強盗……覆面の男が逃走中」

どだだだだだ、と、

絵にも描けそうな足音が彼のいる部屋の前で止んだ。

荒い呼吸が扉を介していてもはっきりと耳に届く。

「死者二十名……無差別、か」

微かにその色素の薄い眉が寄せられた。

記事を最後まで読み終えて、

彼は右手に持っていたコーヒーカップをテーブルに置くと、

背後にある扉の外で停止したままの気配に向かって静かに声を掛  
けた。

「入って来なさい、アンナ」キャプリー」

気配が一瞬揺らぐ。

「は、はいッ!! 失礼しますッ!!」

戸惑いはあるものの元気の良い発声をして、

アンナと呼ばれた人間がちやり、と扉を押し開けた。

朝日に反射して眩しいほどに輝く、

天然ブロンドの緩い巻き髪がアンナの目に飛び込んでくる。

ごくり、と一息を飲み込むと、  
ゆっくりと扉を閉めた。

再度しっかりと姿勢を正して立ち、  
続けて半分に体を折り曲げる。

「すみませんでしたっ!!」

寝過ごしてしまいました!!」

ふと、アンナの態度にブロンドの髪が揺れた。

アンナが人一倍体が固いのを彼は良く知っていたので、  
それにしても上出来な頭の下げ方だと心の中で思いつつ、  
ソファから立ち上がる。

アンナは何も声が掛けられない事に内心びくびくしながらも、  
覚悟だけはしてそのままの姿勢で言葉を待った。

腰や背中が悲鳴を上げ始めているのにも、  
ぎゅっと歯を食いしばって堪えている。

ぶるぶると体を震わせながら、  
部屋の中を移動する気配を追った。

近付いては遠のき、こつこつという革靴の硬い音が、  
アンナの心を更に不安に陥おとしれるような気がしていた。  
アンナにとっては気が遠のく程の一分間が過ぎ去り、  
目の前まで迫った足音がふいに止まった。

(?!)

覚悟をして目を固く閉じる。  
が。

「もういい。今日の任務を説明する」

「あ……」

思わず両手を膝について、ゆっくり体を起こす。  
目の前には白い湯気の立つ小さなマグカップがあった。

「砂糖は二つ入れておいた」

「せんぱい……」

滲みそうになる視界を察知して、  
ぐつと眉根を寄せ目を見開く。

両手でカップを受け取ると、また丁寧<sup>ていねい</sup>に頭を下げた。  
アンナはゆらゆらと揺れながら消えていく湯気を見つめ、  
複雑な気持ちでそつと息を吐く。

(どうして先輩は、いつもこうなんだろう)

本当は毎朝一番に起きて来て、  
この今は事務所代わりになっている部屋も掃除して、  
コーヒーを落とし、  
先輩が起きて来たらブラックコーヒーを差し出すのも、  
全てアンナの役目なのだ。

寝過ぎる事は初めてだとしても、  
彼より早く事務所入りする事はこれまでに一度も成功していない。  
気合を入れて朝五時に事務所に入れば、  
早過ぎる事はあってもきつと一番だろうと実行してみたが、  
それでも今と同じ様に、

コーヒーを片手にソファに座る姿を事務所に見つけた時は、  
流石<sup>さすが</sup>にやる気を削<sup>そ</sup>がれてしまった。

毎日眠らずに事務所にいるのではないかと疑いたくなってしまっ。

アンナにとって本当に気が重いのは、単にそれが原因ではなかった。

優しさが、逆にアンナを追い詰めて行く。

本当は怖くて泣き出してしまっただけで怒って欲しいと、そんな風に願うのは我儘わがままなのだろうか？

つい幾日か前もそうだった。

やっと追い詰めた逃走犯を、

自分のつまらないミスで取り逃がしてしまった時も、

先輩は怒りも嘆きもせず、

何も言わずに上への報告を自分のミスとして処理してくれたのだ。

その後の処罰として向こう半年の減給と、

大量の始末書書きに追われた事も、先輩は黙っていた。

アンナは所属が同じ友人から、

その事実を聞かされ泣きながら先輩に頭を下げたが、

それでも表情一つ変えずに、

「もういい」と一言呟かれただけで終わってしまったのだ。

それがどんなにつらい事か、

アンナはやり場のない気持ちをいつも抱え込んでいた。

きつと自分は先輩に認められていないのだと、

完全に自信を喪失してしまってもいた。

そう、どん底だったのだ。

昨日までは。

(だめだ！ しっかりしなきゃ！

よし、頑張る！)

「何をしている、ここに来て座りなさい」

「あッ、す、すみません！」

アンナは慌ててソファに座り込んだ。  
窓を背にして座る先輩に顔を向けると、目が合う。

「あ、あの」

「何だ？」

「……聞きました。あの逃走犯、  
先輩があの後も追走して、捕まえて下さったんですね。  
本当に有難うございました。それから……  
すみませんでした」

事実を知ったのもまた全てが終わってしまっただけからだ。  
こうして、いつも自分は何も知らない。

「案外詰め甘い犯人だったんだ。」

この近くに潜ひそんでいたから私が捕まえた。

これは任務として当然行うべきものというだけの事だ」

「……………はい……………」

そうではなくて、と、

喉から飛び出しそうになって何とか堪える。

どこか突き放したような言い方にはもう慣れてしまっただけだが、  
今ここで言いたい事は決してそういう事ではないのだ。  
アンナは目を伏せてコーヒーを少し飲み込んだ。  
心の乱れを整えようと試みる。

「本題に入るが、今日は一日、

例の案件に関して周辺の調査を行って欲しい。

この街にそれらしき場所は少ないが念のためだ。

事前にチェックしておいた場所がここにまとめてある」

そう言っって一枚の紙切れが差し出された。  
丁寧な筆跡のメモである。

アンナは手にとってそれを見詰めた。

「それから、直接の聞き込みはするな。  
これに関しては情報を得る事よりも、  
まず身分を洩らさない事を優先する。  
それが上からの絶対命令だ」  
「分かりました」

少し緊張した面持ちでアンナが頷いた。  
この案件のために、  
自分も先輩もここにいると言って良い。  
未だに、アンナはなぜ誰よりも無能な自分が、  
ここに送られたのか理解しかねていたが、  
とにかく先輩に認めてもらえるよう、  
必死にこの案件について取り組んでいた。  
今日からは更に一歩進んだ捜査のようだ。

「あの」

ふと、アンナがメモから視線を上げて言う。

「先輩はどうされるんですか？」  
「私はもう一つの案件の指令をここで待つ」  
「もう一つ？」  
「これだ」

きよとんとするアンナに寄越されたのは、今日の朝刊。

開かれている紙面にすぐに釘付けになる。

「銀行強盗、覆面の一人の男が逃走中……

死者 二十名!? こ、これって……」

「その下を見てみる」

「下…… え? 隣町、って、

こんな小さな銀行を襲ったんですか……

二十人も殺して!」

アンナは理解し兼ねる。

そんなリスクの高い賭けをするのに、

見合わないのではないかと思っただのだ。

きつとすぐに捕まってしまう。

「その現場の写真を見る限り周囲の破損も酷い。

何かに似ていないか?」

「ッ……魔術……!」

「すぐに指令が来ると私は読んでいる。

そして次はこの街のどこかが狙われる可能性が高い。

お前も覚悟しておけ」

「は、はい……!」

アンナは、どうしても青ざめてしまう自分を情けなく思いつつも、

今度こそは、という思いで頷いていた。

今度こそ、先輩の足手まといにならない様に。

「それでは私、早速行って来ます!」



そう言つて立ち上がるアンナを、ふと、  
薄いブルーの瞳が仰ぎ見た。  
アンナはその動きを止める。

「何か……」

「気をつけて。……それから、

ついでにコーヒー豆も買つて来てくれるか？」

「あっ、す、すみません！！ 分かりました！！」

「よろしく」

またも出し抜かれた気分になつて、

アンナは顔を真っ赤にした。

それも自分が先に気付いていなければならぬのに。

（先輩には敵わない！）

三年前だつた。

二十六歳という若さで異例の栄転人事。

誰もが納得をしてしまう程、

何でもこなせてしまう有能な先輩は、

本名をジエクト・シオインという。

その王子の様な外見の美しさから、

女性の間ではこっそり “ロミオ様” と呼ばれていた。

ただその沈着冷静極まりない性格の所為せいなのか、

近付こうという女性は少なく、

浮いた噂は一度も聞いた事がない。

「どうした？」

「は、いえ！ 行つてまいります！」

アンナは深々と一礼をし、  
少々重たい扉を押し開けて自らの任務に向かった。

### 第三章 “優しさ”の持つ恣意と鋭2

「よし、ここにしよう」

朝の人通りが多い時間帯より少し前に、

ロナとサニーの二人は町で有数の繁華街に足を運んでいた。道の端には、

自分達と同じ目的でやって来ている者が大勢並んでいる。

ロナ達もそれに倣<sup>なら</sup>って腰を下ろした。

二人で分担して持つて来た商売道具を構え、

客が来るのを待つ。

その間にもだんだんと人の通りが増えて来ていた。

ロナは忙<sup>せわ</sup>しく行き交う人の波をじっと見つめる。

黒や灰色の落ち着いた色の服、

白いシャツにネクタイ、

茶色や黒の鞆の中には、

書類などが大量に詰め込まれているのだろう。

(……赤……)

無意識に、

母の好きだった色を探している自分に気づき、

ロナは自嘲気味に笑みを零す。

もうとつくに、希望は捨て去ってしまったと思っていたが。

(こんな所にいるわけないさ。

もう、一年も経ってるんだ……)

沈んでいく気持ちを奮い起こそうと、

ロナは強く頭を振る。

そして顔を上げた時にはまた心は少し元気を取り戻していた。この一年間で、ロナは色んな意味で強くなった。

倒れそうになる心に打ち勝つ方法も会得した。

全ては、生きる為に。

(現実なんだ、これが)

軽く息を吐き出して、

隣に座るサニーに視線をやる。

サニーもじつと人の流れを見遣っていた。

もしかしたらロナが探した色を、

サニーも見つけようとしているのかも知れなかった。

兄の視線に気付いて振り返り、二人目が合う。

サニーが先に微笑んだ。

「みんないそがしそうだね。

こんなにあくさんの人、どこに行くのかな？」

ロナはまた人波に視線を戻し、苦笑する。

「仕事に行くんだよ、みんな」

「しごと？」

でも、だれも顔がうれしそうじゃないよ」

「？ どういう意味？」

言葉の意味が解らず、ロナは振り返って尋ねる。

「だって、しごとがあるのに、」

みんなうれしくないのかな？」

真剣な表情で呟く言葉には、

しかし彼女にとってそこまで深い意味は無いに違いない。

「そうだな」と呟き返す以外に、

適当な返事が見当たらなかった。

ロナはこのどこまでも純粹な妹を、  
ずっと不思議に思っている。

元々可愛い妹でもあったが、こんな状況の中では、

どんな人間だって暗く淀んだ気持ちになる筈である。

少なくともロナ自身はそうだった。

日が経つにつれて荒<sup>すさ</sup>んでいく心。

適応していくにはそれが必要だった。

しかしサニーは違った。

どれだけ日が経っても、状況が悪化しても、

その素直な心と笑顔だけは失われない。

それに何度救われたかも分からない。

そうして今もずっと自分を忘れずにいられるのだ。

堕ち切って仕舞わぬ様にと。

ふと、目の前の光が遮断されロナが顔を上げる。

黒系のスーツを着た男が脚を台の上に乗せていた。

初めての客に少しあたふたと手を動かし始める。

そこには終始会話などなかったが、

磨き終わり、代金を手にしてみても喜びが込み上げる。

ワンコイン。

客も慣れたように無愛想に寄越してさっさと行ってしまい、  
見送る視線もほどほどに、

ロナは隣で見ていたサニーに笑顔を向けてコインを手渡した。

「お前がちゃんと持つてるよ」

「シロの中に入れておくから、だいじょーぶ」

言いながら、入れたそばから落ちていきそうな程、ぼろぼろでくたびれた小さな袋にコインを仕舞う。

袋の中央には元は真っ白だったであろう、薄汚れたウサギの刺繍が施してあった。

シロと呼ばれているそれは、

にっこりとこちらに笑顔を向けている。

ロナは何となく不安になってじっとその袋を見つめた。

「本当に大丈夫か、それ？ 穴開いてない？」

「うーんと、まだだいじょーぶみたい」

頼りない答えだが、

サニーは大事そうにそれを握り締めている。

たとえ本当に穴が開いたとしても、

同じ様に言うのだという事はロナにも分かっていた。

それ以上言及するのは止めておく。

ロナ達が構えた場所が良かったのか、

客はその後もぼつぼつとやって来た。

その僅かな売り上げの中でも、

この日は昼食に在り付く事が出来、

久しぶりのまともな食事は又、

ここ数日の鬱塞さを、

束の間でも忘れ去らせてくれるに足る喜びであった。

そうして陽が傾き始めた頃、  
一人の男が他の客と何ら変わらない動作で、  
ロナ達の構える台に脚を乗せて来た。  
ロナもまた他の客と同じ様に無言で、  
男の微かに汚れた革靴に手をかけ、磨き始めた時だった。

「君達は」

意外にも男が声を発した。  
少なからず驚いて思わず視線を向ける。  
目尻に皺を寄せ、優しく細められた瞳にぶつかった。

「君達は、兄妹かね？」

茶色のスーツと茶色の帽子、  
手入れされているであろう髭と、  
ちらと覗く毛髪はすでに色素を失っていた。  
見た感じよりも年を食っているかもしれないとロナは思う。  
相変わらず黙々と手を動かしながら、  
ロナは先程の質問に軽く頷いてみせた。

男はそれに気付いたのかそうでないのか、  
それから暫くまた無言になったが、  
ロナが両足分磨き終わる頃に再度問いが投げかけられた。

「君達の名前は何と言うんだい？」

その質問には流石に違和感を覚えて、疑う様な眼差しを向ける。  
男は、少し困ったように微笑うと、  
ワンコインをロナに手渡ししながら言葉を付け足す。

「そんなに警戒しなくても危害を加えたりはしないよ。  
ただ君達の名前が知りたいと思ったただけでね。

……お嬢ちゃんはいくつかな？」

「……五さい」

穏やかな瞳を向けられ、

サニーは兄の後ろに隠れながらも小さく返答していた。

「そうか、そうか。ほら、これをあげよう」

男は背広のポケットから小さな飴玉の包みを二つ手に取り、  
二人に差し出す。

しかし、当然ロナもサニーも受け取るうとしなかった。

「へんなものは入っていないよ。

単なる、その辺に売っているキャンディーだ。

さ、お食べ」

そう言っ促されるが、

ロナはサニーの手を取って頑かたくなにそれを拒んだ。

男は、やれやれ、といった様子で苦笑し軽く嘆息すると、  
またポケットに飴玉を仕舞う。

「ああ、懐かしいな……」

「？」

男の呟いた言葉が、

自分達に向けられたものなのかどうか少し迷った。

黙って次の言葉を待ったが、



男の表情に変化がない所を見ると独り言らしい。

ロナが相変わらず男を見上げていると、

男はほんの微かに真剣な色を含んだ瞳をロナに向けた。

「お兄ちゃんに相談なのだが、

君の妹さんを私の家に迎えさせてくれないかな？」

「？」

僅かに婉曲された言葉の意味を掴み損ね、

ロナはやはり黙ったままでいた。

じわじわと気持ち悪さが込み上げてくるのを奥歯を噛み合せて堪える。

「お嬢ちゃんと二人で生きていくには色々大変ではないかね？」

このままだと君達は二人とも餓死してしまう」

「あんた……？」

初めて聞いた、ロナの子どもらしい声に、

男が表情を緩ませた。

「私は元医者でね。

栄養状態がいいかどうか位は一目見ればすぐに分かる」

細い足をゆっくり折り曲げ、二人の目線の高さに顔を置く。

そして又、ロナにその不思議な色をした瞳を傾けた。

「私に、この子を売ってはくれまいか？」

「ッ！！」

ロナは咄嗟にサニーの手を強く握った。

侮<sup>あなご</sup>られまいときつく相手を睨み付ける。

(人身売買だ……っ！)

この手の話は毎日のようにどこかで囁<sup>ささや</sup>かれている話題の一つだっ  
た。

路上生活仲間ストチルでそうやってこの町からいなくなった者を、

“新人” のロナでさえ何人が知っている。

「ああ、誤解しないでくれ。

働き手が欲しいから売ってくれと言っているのではないんだ。

私の娘として、

私の家族として迎えたいという事なのだよ。

悪い話ではないだろう？」

「……もう、靴磨き終わっただろ……ッ

……帰ってくれよッ……！」

言いつつ、震える手で商売道具を無造作に鞆に詰め込み始める。

サニーは自分の後ろにしっかりと隠したまま。

男から小さく息が吐き出されるのを耳にしても、

ロナはその手を止めなかった。

「君が戸惑うのも無理はない。こんな時代だ。

しかし、私は本当に君達の将来これからが心配なんだ。

人間は食べなければ死んでしまうぞ」

「サニー……！」

ロナは妹の手を引き、荷物を抱えて乱暴に男の脇をすり抜けた。  
そのまま振り返らずひたすら前進し続ける。

(いい話なんかあるもんか！)

そうやって事件に巻き込まれるというのは、子どもでも知っているこの時代の常識だ。車に気を付ける、知らない人から物を貰わない、知らないおっさんは無視する！必ず言い聞かせられる三か条ではないか！

(サニーは絶対に……っ！)

口ナは奥歯を噛み締める。握る手にも知らず力が籠こもった。

(絶対におれが守るんだ！！)

「お兄ちゃんっ、手、いたいよ……ッ！」

突如発せられた悲鳴に似た声にはっとして、足を止める。まず周りを見回し男の姿がない事を確認すると、そっとサニーの手を離れた。

「ごめん、ちょっと力入れすぎちゃったな……」

サニーは握られていた方の手を反対側の手で軽く擦さすった。表情が暗い。

随分驚いたに違いない。

人身売買の、現場。

「お兄ちゃんが、いるからな……」

悲痛な面持ちでそう呟き、  
今度は優しくサニーの手を取り歩き出す。

「……………」

サニーは無言のまま、  
繋がれたその手をしっかりと握り返していた。

### 第三章 “優しさ”の持つ恣意と鋭3

翌日。

口ナとサニーは昨日とは別の繁華街の路上にやって来ていた。稼ぎという面では昨日のあの場所には及ばなくとも、昨日の場所に行くよりは安全だと判断した為である。少なくともあの男に会う確立は低い筈だ。

「サニー、腹減った？　なんか食べる？」

昼も少し過ぎた時間に口ナが問い掛けた。

昨日は昼食を食べていたし、

あんな事の後で結局食欲が湧かずに夕食は食べず終いだっただ。

昨日の売り上げの残りでサニーに食べさせてやるうと思ったのだが、

意外にもサニーは首を横に振る。

「遠慮しなくていいんだぞ？　おれも食べるからさ」

「んん、私、いまはいい」

心なしか元気が無いように見えた。

少し心配そうに顔を覗き込んだ口ナに、

サニーはにこりと笑ってみせる。

「じゃあ、お水買ってきてもいい？　のどかわいちゃった」

「うん。あ、ジュースにしたら？　水よりも栄養ありそうだし」

「わかった！」

元気に立ち上がって、サニーが斜め向かいの商店に歩いて行く。

その後姿をじつと見詰めながらロナは短く息を吐いた。

(不安なのかな……)

昨日のあの男の言葉の意味を、

サニーにだって理解は出来ている筈なのだ。

何が起こったのか彼女自身気付いている。

もしも強引にでも連れて行かれたらどんな目に遭うか分からないと。

そう思ったらきつと不安で不安で、仕様が無いに違いない。

サニーの笑顔が久しぶりに悲しいと思い、

ロナは何とも言えない怒りに似た心の焦燥を感じていた。

(おれが守らなきゃ……サニーだけは)

責任感がロナの心を奮い立たせる。

もしかしたら自分は、

その為だけに今を生きていると言ってもきつと過言ではない。

そう考えつつもずっと瞳に映っていたサニーが突如、

ジューズを片手に持ったまま体勢を崩して倒れ込んだ。

躓つまずいたのか。

ジューズがころころとアスファルトを転がった。

「サニー……っ」

ロナが駆け寄ろうと立ち上がったが、

それよりも早く、ふと黒い影がジューズを拾い上げ、

そのままサニーも抱き起こした。

振り返ったその影は、見覚えのある、

目尻に皺の寄った優しい眼差し。

「　　ッ！！」

ロナは声にならない悲鳴を上げ立ち尽くす。

サニーを抱きかかえてこちらに歩み寄って来るその男は、紛れもなく昨日の、あの男だった。

目の前まで来た男がサニーを地に下ろしてやり、

その手にジューズを持たせた。

そして又につこりと笑むと、ロナにその瞳を向ける。

「今日はここにいたのだね。実は私の家はこの近くのだよ。

余程縁があるらしい……そんな怖い顔をしないでくれ。

本当に、私は悪い事はしないよ」

そう言って苦笑する男にロナはやはり敵意を剥き出しにする。

「悪い奴はッ……みんなそうやって言うんだ！」

「ははは、そうか！　そうかも知れないな、」

男は本当に可笑しそうに声を上げて笑った。

ロナはジューズを持って立ち尽くしたままのサニーを背後に隠し、鋭い眼光を男にぶつける。

「サニーはやらない！　金なんていらさない！」

後ろにいるサニーが微かに震えているのに気付き、

ロナは声を荒げていた。

「おっさんッ！　帰れ！！」

「は、ははは、　“おっさん”　か。」

そつだ、自己紹介もしないままだったね、申し訳なかった。  
私はリチャード・ドネルセンという」  
「うるさいッ！」

ロナが男　ドネルセンの言葉を遮って叫んだ。  
僅かに表情が歪んで、

ドネルセンは悲しそうに笑んだまま一旦言葉を切った。  
大きく息を吐く。

「……分かった。

もつお嬢ちゃんを売ってくれとは言わないよ。  
そこまで私も鬼ではないからね。

残念ではあるがここまでにしよう」

「……ほ、んと、か？」

「嘘はつかないよ。……ほら、出ておいで。

お嬢ちゃん手を怪我していただろう？」

サニーがそつと顔を出し、

ロナの後ろに隠れたままドネルセンを見詰めた。  
どこか虚ろな目をしていた。

促されるままに両手を差し出すと、

ドネルセンは丁寧に畳まれたハンカチを取り出して汚れを拭いて  
やり、

昨日は飴玉の入っていたポケットから絆創膏を取り出して、  
サニーの血が滲んだ部分へそれを貼り付けてやる。

「本当は傷を洗った方がいいんだがね、とにかく今は止血だ。  
後で必ず水で洗い流すんだよ、いいね？」

もつ一つ絆創膏を渡しておこう」



ドネルセンのポケットからもう一枚絆創膏が出てきた。  
黙したまま一部始終を見ていたロナは、  
まるで魔法のポケットだとらしくもない事を考えたりしていた。

「それでは、私は去るとしよう。」

君達はいつもこの辺りにいるのかね？

迷惑でなければまた様子を見に来るよ」

そう言つて又微笑み、ドネルセンは人込みの中に消えて行つた。

暫くその後姿を見詰めていたロナが、

一気に気の抜けた表情で座り込んだ。

大きく嘆息する。

「変なおっさん……」

呟いて横に視線をやると、サニーがジュースの蓋を開けて、

ごくごくと飲み込んでいる所だつた。

そして案の定、ごほごほと咳き込む。

「あーあ」とロナは零して、小さな背中を擦つてやつた。

その手に伝わる体温の温かさに、

きゅっと心が締め付けられる気がしていた。

(あの人、本当はいい人なのかな……)

もしかしたらドネルセンの言うように、

養女にして貰うというのはこれ以上ない程の好待遇なのかもしれ  
ない。

彼に一体どういう理由があつて、

身元も分からないサニーのようなストリートで暮らす子どもが欲  
しいと言うのか、

ロナには全く見当も付かない事ではあったが、  
少なくとも自分達を傷付ける事はないのではないかとそんな気が  
していた。

「じほっじほっ！」

苦しそうにサニーが咳き込んだ。

ロナは呆れ顔でサニーを覗き込む。

「全く、どうしてももっとゆっくり飲めないんだよ、サニー？」

「だってえ……」

のどがかわいてたんだもん……けほ」

視線を下に落としたまま、呟くように答えた。

ロナはサニーの手に貼られた絆創膏を見詰めて、  
ぼんぼんと頭を撫でてやる。

ずっと元気のないサニーが少し気になりはしたものの、  
目下の所人身売買の危機は免れたのだ。

「……手、帰りに公園に寄ってちゃんと洗おうな？」

「うん」

漸く顔を上げて、サニーが少し笑った。

### 第三章 “優しさ”の持つ恣意と鋭4

月の煌きに誘われ、顔を上げると。  
黒い空の中心に肥大し過ぎた光の塊が、  
彼の眼前にまで迫って来ていた。

(落ちてくる!!)

身を縮めて固く両目を合わせる。  
それでもなお瞼を突き抜けて侵入してくる光に、  
彼の目は焼け焦げてしまった様な痛みを覚えた。  
両手で押さええて呻くが、それは何ら意味を成さない。  
その前では自分は無力だ。

痛みを堪えていた筈の口元が僅かに緩んだ。  
続けて全身に込められていた力も放棄されると、  
彼はそこにある光源への服従を悟る。  
きつと自らの意思でもあると、分かっているのだ。

(ドコニモ……………ヤラナイ、デ……………)

すでに真つ白な煌きの中で、彼の体は感覚を失っていく。

(灼カレレバイイ……………ツナゼ生カス!!!)  
ツ……………うアああアああアアアッ

それは一体誰の慟哭だったのか。  
どこにも届かない想い。

ハッ！！と、  
ロナは眼球が弾け飛びそうな程勢いよく両目を見開いた。

「ッ……はぁッ……はぁッ……！！！」

体を起こし、  
そこがいつものガレージ倉庫だと認識すると大きく息を吐き出した。

心臓辺りに手を当てて、  
乱れた意識と呼吸を落ち着かせようとする。

（何だろ、すごく、怖い夢だった気がする……あんまり覚えてないや）

目の覚める直前まで記憶に留まっていた筈が、  
すでに曖昧に滲んで見えなくなっていた。  
薄らと、酷い痛みだけの感覚だけを感じている。  
とてつもなく熱くて

「うう……」

「サニー？」

隣に眠る妹の呻き声にロナが振り返った。  
しかし暗くてよく見えない。

ロナは暗闇に目を凝らす。

「サニー？」

起こしてしまったかと、ロナはもう一度呼び掛けた。

「うう……、ううう……ッ」

「サ」

一瞬の内に緊張が走った。

寝言にもただの発声にも似つかない。  
触れる体に伝わる震え。

「サニーっ！！ 大丈夫か！？ おいつ！！」

ロナがサニーの顔に触れた。

苦痛に歪んだ表情と、灼けそうな程の熱さ。

「サ、に、」

全ての血液が一斉に引く音。

刹那襲った絶望感がロナの思考を空白にした。  
震える手を、どうしようもなく空中に泳がして。

（い、いやだ……いやだ、うそだ、こんなの、）

「ッサニー！ 聞こえる！？」

おれの声聞こえるか！？ サニー！！」  
「ううう……る、し……」

吐き出される息も触れている体も何もかもが熱い。  
とてつもなく熱い。

視界が揺れた。

ぼろぼろと雫が零れ落ちる。

(死んじゃだめだ！ 絶対に！！)

ロナはぐつと歯を食い縛り、乱暴に涙を拭い去る。  
そしてぐつたりとしたサニーを抱え上げ、背負った。

「がんばれサニー、がんばれ」

暗くて冷たいガレージ倉庫内を半ば走るようにして通り抜け、  
薄暗い外界へ飛び出す。

皓々(こうこう)と煌く月にも、ロナは全く意識を向けなかった。

(早く早く早く……っ！！)

暗くて何も見えなくても熟知した道をどれくらい進んだのか。  
ネオンの点滅する風景を横切り、

静かな通りにある一軒の建物の前でロナは足を止めた。

そしてそのまま顔を持ち上げ、腹から空気を吸い込み一気に吐き  
出す。

「っ開けてくれ！！ 病気なんだ！！ 開けてくれっ！！」

サニーの、全てを焦がしてしまいそうな熱い息を首元に感じなが  
ら、

必死に叫び続けた。

「開けてくれ……ッ!!」

声が掠れ、咳き込む。

ロナは唾を飲み込むと、

サニーをゆっくりりと地面に横たわらせた。

「待ってる、すぐだから、絶対に大丈夫だから……!!」

まるで自分に言い聞かせるように呟いて、

ロナは診療所の扉に飛び付いた。

「開けてくれっ!! 病人がいるんだよ!!」

死にそうなんだ!! 開けてくれ!!

熱くて死にそうなんだっ!! 開けてくれっ!!」

どんとんと力の限り木製扉を叩き続ける。

そうしながら、ロナは後悔していた。

(ずっと咳き込んでたのは病気だったからだ!

なんで気付かなかったんだ!)

それだけに止まらない。

ここ最近のサニーの様子は明らかにおかしかった。

食欲がなかったのは、あの出来事の所為だと思っていた。

水が飲みたいと言ったのは、単に喉が渴いたからだと思っていた。

元気がないのも、だから、

あの出来事が原因だとばかり……!!

「ちくしょおっ!! 開けてくれよっ!!!!」

ロナが体を扉にぶつけた時だった。  
診療所の玄関らしき電灯が点いた。  
間もなくがちゃがちゃと鍵が外され、  
開かれたドアからはこの診療所の所長の一人息子が顔を出す。  
彼も若いながらここで働く医師である。  
ロナはすぐさま飛び付き懇願した。

「助けてくれ！　すごい熱があつて死にそうなんだ！  
はやく　　ウツ！！！」

ロナが後方に大きく飛び、勢いよく地面に全身をぶつけた。

「こほつこほ！！　っ……………はッ……………はあッ！  
うぐうう……………ッ！！」

呼吸をすると蹴り付けられた腹部に鈍痛が走る。  
口の中に鉄の味が微かに広がった。

（な、んで、）

痛みに歪んだ顔を持ち上げたロナの瞳に、  
腕組みをしてこちらを見下ろす医師の冷たい視線が飛び込んで来  
る。

「こんな真夜中にでかい声で喚きやがって……  
張り紙が目に入らねえのか！？

診療時間は夕方六時までなんだよ。

急患ならあつちの総合病院にでも行け、馬鹿野郎が！！」

「ンだとッ　　っ！！」

「なんだ、文句あんのか！　　ああ！？」



「……クソ医者ッ！！」

刹那、医師の右足が視界を掠めたかと思つと、  
がつん！ と目の前に火花が散つた。  
同時に左側の頬の辺りに激痛が走る。  
一瞬意識が飛んだ気がした。  
再度冷たいアスファルトに沈み込む。

「がはッ！！！」

口の中を切り、ロナは血を吐き出す。  
そのまま暫く咳き込むロナを目の前にしても、  
医師の態度は冷酷なままだ。

「はっ、口答えしてんじゃねえぞ！！  
……何にしても、お前みたいな汚ねえストリートのガキに、  
打つてやる注射なぞ一本もないがな！！ クソがッ！！」

医師は大声でそう吐き捨てると、  
まだ気持ちが収まらないのかこれ見よがしに大きな音を立てて扉  
を閉めてしまった。  
がちゃがちゃと施錠される音が暗闇に響く。

### 第三章 “優しさ”の持つ恣意と鋭5

再び訪れた暗闇に、ロナはふらふらと立ち上がった。

「くそ……いしゃ……ッ……」

でっかい、びよーい……どん、だけっ……とおいと……ッ

……ちくしょおッ……ッ……！」

蹴られた腹部と顔面が痛かった。

そこにも又、灼ける様な熱が生じている。

(正夢かな……)

もしかしたらこのまま自分は、

この熱に灼かれて仕舞うのかもしれない。

ロナは口の中に溜まった血を吐き出し、

苦しそうにしているサニーをもう一度背負った。

どこからそんな力が出てくるのか分からなかったが、

何に変えても妹だけは守らなければいけないと。

その一念で。

(死ぬんじゃないぞ、サニー……)

がんばれ……がんばれ……お願いだから)

ロナは痛みで揺れる前方を見詰め、歩き出す。  
そして隣接している薬屋の前で立ち止まった。

「っ薬売ってくれッ……！！」

今出せるであろう有りつ丈の力で叫び続ける。

「はあっ、はあ　　っ開けてくれッ……

はあっ　　っ開けて下さいッッ！！！！」

ずる、と、サニーがロナの腕から滑り落ちそうになった。

慌ててその相変わらず熱を持った体を持ち上げる。

そうして叫び続けても、

二度と扉を開けてくれる診療所も、薬屋もなかった。

(クソばかりだ……)

元々この町も病んでいる。

皆がそれぞれに貧しさや苦しさの中にいて、

他人を省みる余裕を失ってしまったているのだ。

況<sup>ま</sup>してこの“汚れた”　子どもと関わりとうという奇特な人間は  
いない。

人々の先入観とはそういうものである。

(どこへ向かえばいい?)

一歩一歩歩きながら、ロナはそんな風に自問した。

どこへ。

行く当てなどとつくに尽きてしまっているのに。

「死んじゃ……だめだ……

サニー……

死んじゃ、だめだぞ……っ！」

怖かった。

サニーがこのままいなくなったら、自分は本当に一人になってしまつと、

考えるだけで恐ろしかった。

(おれ、卑怯だから……自分が一人になりたくないから、サニーは絶対に死んじやだめなんだ……頼むから)

一人に、しないで

「ッ!」

ロナがよろめき、地面に倒れ込んだ。  
顔を強く打ち付ける。  
同じ左頬が痛んだ。

「……サニ、……だいじょう、……」

直に伝わる心臓の鼓動だけが彼女の生存を裏付ける。  
ロナはサニーを抱き抱えたまま、仰向けになった。  
目の前には、どこかで見たのと同じ光明の、  
漆黒の空に浮かぶ、月。

「……おれ……」

サニーをきつく抱き締める。

「何も悪いことしてないだろ……  
なんで、おれとサニーだけ、こんな……?」

だんだんと月が輪郭を無くし、肥大し始める。

(ああ、そうだ、こんな夢だったんだ)

こつやって、月が落ちて来て。  
そして。

このまま飲み込んでくれても構わないと、思った。  
サニーも自分も、すでにこんなにも熱を伴って痛みを耐えている。  
口ナはぎゅっと唇を引き結び、  
そしてその隙間から零す様にぽつり、呟いていた。

「ッ……だれか……たすけて」

肥大していた月がぐらつと滲み、  
またその輪郭を僅かに取り戻した時。

眼前が暗闇に変わった。

ぱちりと瞬きをした口ナの視界に、突如現れた闇が音を発する。

「大丈夫かっ!？」

「」

闇だと思っていたものが更に温かい温もりぬくを持っている事を、  
抱き起こされたその両手から知った。

「どうしたんだこんな所に倒れて！」

「……ん？ 君達は確か……」

「お、っさ　？」

逆光でその顔は見えなかったが、聞き覚えのある声と話し方だった。

確か、リチャード、なんとか。

「大変だ！ 妹さんはひどい高熱だ、

君も怪我を負っているじゃないか！

一体どうしたと言うのかね！？」

言いつつ、リチャード、ドネルセンは二人を同時に抱え上げた。

その動作に、ロナが体の痛みを思い出し小さく呻く。

「ああ、済まないな。とにかく家の中に入ろう」

「おっさん家……？」

「家の目の前で倒れていたんだ。幸運と言うべきか……」

それはきつと自分達に向けられた言葉ではなかった。

ひどく優しかったのだ。

きつと、彼自身への言葉。

「……君達は、軽いな……」

ふと、悲痛な声色でドネルセンがそう呟く。

「……軽すぎる」

「……おっさん、が……力、あるんだ……」

現実を現実として悲観視してはならなかった。  
生きていく為に。  
何も求めない為に。

「おれは……おっさん、認めてないから……」  
「……………」

ドネルセンが小さく息を吐き出した。  
笑った様だった。

温かさを手放せなくなったら、もう一度現実に戻るのかどうか。  
ロナにはいつまでも不安ばかりが付き纏っているという事を、  
彼も又知らない。

## 第四章 “覚悟”が結ぶ点と塊<sup>1</sup>

### 第四章 “覚悟”が結ぶ点と塊<sup>かい</sup>

この辺りの真夜中近い時間帯というのは、中央と比較にならない程静まり返っている。先日根を下ろしたばかりで土地勘も何もないままだったが、退治屋たるものそれを言い訳に被害を拡大させてしまう事は、その時点で最早負けを認めた事になるのだと、学生時代何かの授業である教授から繰り返し言われていたの思い出す。

「ノースブロック七十六番街とイーストブロック四十番街！」

『近くに道があつたら左に曲がつて！』

「あつた！　ここ行こう！　ノース一番！　近いな！」

『OK！　真つ直ぐ行って右手に公園探して！　十八番！』

月が明るく足元を照らしていた。

街灯の全く無いこの街において異常な程の月光を有難く感じている。

同時にこんな月夜にはいい思い出があまりない事も承知していた。

『急いで！　もう迫って来てる！』



全力で走り続けるアッシュとジュニアの耳元に、  
キキの焦った声が飛び込んで来る。

「くそ！ 分かってる！」

退治の時にはいつもある程度の余裕を残すアッシュが珍しく毒吐いた。

ジュニアも厳しく眉根を寄せたまま真っ直ぐ前を見詰めている。

「！ 見えた！ 公園！」

アッシュの声が闇に響く。

入口を確認して二人は立ち止まった。

何の姿も見当たらない。

『公園の裏手が山だわ！ ということとは、  
公園から先に行かせないで』

「！！！」

キキの言葉が耳の奥で途切れた。

普段と何ら変わらないであろう、

無人の空間に現れた異変に二人は栗立<sup>あわ</sup>つ。

小型の通信機を無造作に取り外し、

二人は月光が照らし出す青白い空間を見詰めた。

空気が張り詰めている。

「来るぞ」

依頼が届いたのは一時間前。

四人はそれぞれの部屋で自由に寛くわいでいた。

いつもならずで眠っていたかもしれない夜の時間帯。

アツシユは自分のベッドに横になり、

リゼはリゼでベッドに半身を起こして座り、

何気ない会話を交わしていた。

時折二人の楽しい笑い声が静かな空間に優しく響く。

リゼは大きな瞳をアツシユに向けて、話の続きを欲した。

「それでその後どうなったの？」

アツシユもじつとその瞳を見詰め返し、

意味有り気に笑みを作る。

「決闘だよ、こうなったら白黒はつきりさせてやる！ って。

ジュニアもあの時は反対しなかったんだよな、

キキにも被害が及んでたから」

「え？ じゃあ、キキさんとジュニアさんはその頃からもう？」

「や、この時はまだ付き合ってたよ。」

キキは別の奴の事好きだったから。

ただ俺たち仲良かったから、ジュニアだけじゃなくて、

キキも先輩の標的になったんだ。

んー、よく考えたらこの事件きっかけにキキの気持ちが変わったのかもなー。

それから暫くしていい感じになったんだっけ」

「へえ……何だか素敵ね」

リゼの呟きにアツシユが首を傾げる。

「すてき？ どの辺が？」

「だって、それから今までずっと一緒に、  
今でもそれは変わらないんだもの」

「……………」

アツシユはじつとその言葉を聞いていた。

と同時に様々な思いが脳裏を掠めたが、

リゼの表情を見る限りつらい記憶を思い浮かべた訳ではなさそう  
だ。

無言で注がれるアツシユの視線に気付いたリゼが少し戸惑いを見  
せる。

すると束の間の静寂をアツシユのはっきりとした声色が断った。

「自信あるよ、俺も」

「え？」

言葉の意味を反芻する間もなく、

またすぐにアツシユが小さく笑い声を立てていた。

「話逸れちゃったな、」

オチまでもうちよつとなんだけどなあ」

本当に可笑しそうな様子にリゼも思わず顔が緩む。

先程の言葉も曖昧にぼやけていった。

初めはそう、アツシユ自身のおもしろ体験話だったのだ。

リゼの知らない彼の学生時代の話である。

そうしてアツシユを知る事が出来るのはリゼにとって本当に嬉しい事だった。

学生時代の話は又、  
自然とジュニアやキキを知る事にもなり、  
今の様に脱線してしまう事もしばしばだったが、  
それはそれでリゼには楽しい時間になっていた。

「えっと、その先輩と決闘になったのよね？  
それでどうなったの？」

リゼが話題を戻し先程の話の続きを促す。  
オチを頭に思い浮かべながらアツシユは言葉を繋げた。

「真夜中に外で勝負したんだ。  
魔術使うと教授達にバレるから素手勝負。  
どっちが勝ったと思う？」

急に問いを投げられたリゼは微かに視線を傾けて考えた。

「そうねえ……先輩って三つも上でしょう？  
それにそれだけ怒ってたら何して来るか分からないし……」  
「魔術も使えないしな。  
はは、リっちゃん、ほんとーにそう思ってる？」

いたずらっぽく視線を向けるアツシユにリゼは微笑み返していた。

「うん。  
どれだけ相手が強くても、  
きつとアツくんは負けない」

その答えにアツシユは満足気に頷いた。

「もちろん、俺にも敵わない人はいるけどね。

でもその先輩は本当に弱かった。

だから俺の周りに手を出して来たのかもしれないけど。

とにかく決着が着いたから、

もうこここそ悪さするのは止めて下さいって言ったんだ。

可哀相だけど先輩の好きなその子は先輩じゃなくて俺の事

ってそこまで話したら、先輩ちよっと泣き出して、

そこからずっと語るはめになってさ、

でも最後は結構仲良くなったりして、はは、

“今日の敵は明日の友” みたいな」

場面を思い出しているのかアツシユが笑いながら言った。

リゼも笑っていたが心の中では違う事を考えていた。

気になるのはそこではない。

(アっくんモテる、のかな……その人とはどうなったんだらう?)

過去のことではあるが一旦耳にすると気になってしまっ。

だからと言って聞いていいものかどうか迷っていた。

(アっくんに彼女とかいたのかな?)

……いない訳がないわね、きっと)

それどころか数知れず、という辺りの事は、

実はリゼは全く知らない。

再会して間もない事を思えば当然であるが。

そんなリゼの心中の不安を知ってか知らずか、

アツシユは話の続きがあるんだ、と言って、

再度話し出そうとしたまさにその時、

突然通信機の様な細い機械音がアツシユの表情を一変させた。

「？ これ、何の音」

「……ごめんりっちゃん、」

話の続きはまた今度だ」

「あ、アっくん」

ひらりとベッドを飛び降り真っ直ぐ部屋を出て行く。  
俄ににわかダイニングが騒がしくなった。

## 第四章 “覚悟” が結ぶ点と塊2

何となく不安を覚えて、  
リゼも慌ててダイニングに顔を出すと、  
テーブルを中心に三人が集まっていた。

「どついう事!？」

キキがテーブルに置かれたパソコンを操作しつつ声を上げる。

「あと一時間弱って 時間ないのに全然駄目!？」

チームの一つや二つその辺にいるでしょ!？」

え? なんですよ? は!？」

何言ってるの!？」

どうやらどこかと会話をしているようだが、  
キキの様子からしてどうも穏やかではない。  
同じ様なやり取りを続けるキキの横で、  
アッシュとジュニアが溜息を吐くのが聞こえた。

「ああ、時間がない!

分かってるわよ、しょうがないじゃない!!

ひと言!!

退治屋名乗るんなら命くらい懸けなさいってね!!」

キキの叫びが部屋に響き渡った。

それ以降通信は途絶えた様だ。

もしくはキキが一方的に切ったか。

どちらにしろリゼは最後の言葉に眩暈めまいを覚える。

命を懸ける、とはどういう意味なのか？

「ごめん、どこも駄目みたい……」

粘ってもらったんだけど通話拒否されてるって……」

キキがうな垂れてそう呟いた。

その顔からは先程までの怒りはすでに消え去っている。

心なしか青ざめているようにも見えた。

「しょうがねえよ、近くに低レベルのチームしかいないんだろ。

最近の魔物の様子がおかしい事考えれば、  
戦いを避けるのもある意味賢明な選択だ」

アツシュがジュニアに同意を求める様に視線を向けると彼も頷く。  
でも、と口を尖らせたのはキキだ。

「だからってこの状況でうちにだけ頼るなんて、

そんなのあんまりよ……絶対ムリ!!」

「そう言っつなよ。何とかなる」

「何とかって!」

根拠のないアツシュの言葉にキキが訴えるような瞳を向ける。

更に言い返そうとした所を、

今度はジュニアに止められ閉口するしかなかった。

キキが消極的になるのも今回の事情からすれば無理からぬ事である。  
る。

先程の通信機のような音は特殊な場所からの依頼であると同時に、

最も危険な依頼、即ちハイレベルの魔物の依頼を意味する。

ハイレベルに分類される魔物はそう多くはないが、



危険故にあるものには即時対応出来る様、  
それぞれの特徴に合わせて魔術で構成された探知機の様なもの  
が張られていた。

その代表的なものが今回の依頼でもある

“ホウ” 退治である。

ホウは気まぐれにどこからかやって来ては町を、家畜を襲つ。  
遠い昔には伝説の魔物ほどの被害はないにしても、  
人々からは恐れられる魔物であったが、  
今ではこういつた措置のおかげで殆ど被害は出ていない。

ホウの特徴を挙げるとすれば、第一に群れである事。  
単独では絶対に行動をしない。

そして猿の様な外見に跳ねる様な素早い動きと、  
両手に現れる魔術の剣。

戦略は無い事もない。

負けをいち早く認識させて退散させれば良い。  
相手に負けと思わせるまで攻撃し続ける、  
それが群れであるホウの唯一の攻略法だった。

「時間がない。どうするアッシュユ？」

ジュニアが厳しい表情で問いかける。  
いつものやり取りだったが、  
アッシュは乾いた笑いを洩らし首を振った。

「俺に聞くな。術剣の扱いはお前の分野だろ。  
どうすればいい？」

アツシュにとってこのホウ退治が厄介なのはそこにも理由がある。剣を扱うのは決して得意ではなかった。

しかも、通常数の多いホウ退治には複数のチームが共同で行うのだが、

今回は近くにいるチームが揃いも揃って依頼を断ってきている。

ホウ退治専門の連絡員に、

再三参加チームを探すよう頼んでも結果は変わらなかった。

勝ち目のない勝負はしたくない、という理由を聞いて、

キキは思わずあの様に叫んでしまったのだ。

「そうだな、すまない。悪いがアツシュ、

お前も初めから剣を使ってくれ。

ホウが他の魔物と同じように凶暴化しているとしたら、きつとすでに戦闘態勢だ」

ホウは短いが鋭い爪を持っている。

初めの内はそれで引っ掻き回すだけであるが、

劣勢になると術剣を出現させる。

ジュニアの言う戦闘態勢とは、

つまり相手も初めから剣を振り回してくる、ということだ。

「キキ、百だったな？」

ジュニアがキキを振り返って問うた。

「……うん」

すぐに低めのトーンでキキが答える。

敵の数は通常の、倍。

アツシュは両腕を持ち上げ、

伸びをする様な格好で天を仰いだ。

「百対二、後はスピードで圧倒するしかないな。  
……俺は一匹ずつが限界だぞ。  
体力持つと思うか？」

誰にとも言えぬ問いを零したアツシユに、  
ジュニアが僅かに苦笑を洩らす。

「お前なら大丈夫だろ」

「ハッ」

上向いたまま笑い、

アツシユは又ジュニアに真っ直ぐ視線を戻す。

「ジュニア、頼んだぜ。俺も全力でいく」

覚悟を決めた眼。

「了解」

頷いたジュニアにも、  
アツシユの覚悟がいつもの依頼の時とは異質である事は分かって  
いた。

使い慣れない剣を振り回すには、

どうしてもスピードが制限されてしまうという事実。

ホウ退治の厄介な点がもう一つある。

“血”の匂いに敏感に反応し、そこへ群がるという特徴。

攻撃を絶対に受けてはならない。

それが勝敗を分ける一番のポイントだった。

#### 第四章 “覚悟”が結ぶ点と塊<sup>3</sup>

「あと三十分！ 時間がないわ！」

キキがいつの間にか開き直った元気な声を上げる。

それに呼応するようにアッシュとジユニアは頷き合った。

「これ、付けて。私が逐一場所を伝えるから」

キキの手から小型の無線機を受け取り耳に埋め込む。

その様子を眺めながら、キキは少し目を細めていた。

視線に気付いた二人と目が合う。

「気をつけて、」

落ちて行った言葉がどこか虚しい響きしか伴わなくても。

キキは、微笑んでいた。

そこへ。

「アつくん！」

リゼの声が静まり返った空間に響いた。

それまでずっと、

その場にいなながら何が起こっているのかも聞けないで、

ただじっとしている事しか出来なかつたりゼが、

漸く口よちやに出来たのはそれだった。

「リっちゃん」

振り向いたアツシユがゆっくりとリゼに歩み寄る。  
リゼを映す瞳はいつもと変わらない。  
それなのに得体の知れない恐怖が全身を支配していくのを感じ、  
思わずアツシユの両腕を掴んでいた。

「……あ……」

リゼはアツシユが自分の言葉を待っていると分かったが、  
言つべき言葉を見つけれない。  
聞きたい事はたくさんある。  
どこに行くのか。  
何をしに行くのか。  
危険ではないのか。

(このままずっと帰って来ないなんてこと、ないよね?)

腕を握る手に知らず力が籠こもる。

この手を離したら、  
もう二度と会えなくなるような気がしたのだ。

視線がぶつかったまま、どれくらい黙っていたのだろう。  
ふと、アツシユがリゼの手を解ほどいた。  
自由になった両手はそのままそつとリゼの頬に触れる。  
すぐ目の前に濃いブルーの瞳があった。

「アつく」

リゼが何かを言いかけた時、  
頬に違和感を覚え少し眉を寄せる。  
悪戯つ子の様なアツシユのにんまりとした顔が目映った。

「やっぱり笑った顔の方がもっと可愛い」  
「!!!!!!」

驚いて耳まで真っ赤になったリゼが、  
アツシユの手と視線から逃れ両手で顔を覆う。  
そうして俯いてしまったリゼを見詰めながら、  
アツシユは静かに息を吐いて苦笑していた。

リゼの不安もよく分かっているつもりだ。  
数年一緒にやっているキキでさえ、  
毎回少なからず不安を抱えているのだから、  
退治屋を、ましてこの世界を全く知らないリゼの不安は、  
想像以上に大きいのもかもしれない。

アツシユは「んっ！」と腕を回し、  
扉に向かって歩いて行く。

はっとリゼが顔を上げると、三人の笑顔がそこにあつた。

「んじゃ、ちょっと行って来るかあ!」

「依頼片付いたら寄り道しないで真っ直ぐ帰って来るのよ!  
特にアツシユ!」

「俺がちゃんと連れて帰るよ」

「それ以前にこんな真夜中に開いてる店なんかあるかよ、この町に!  
それに、まだ話の続きがあるからさ、なありっちゃん?」

「え、あ……うん、そう!」

突然振られて慌てて返事をした。

そこら辺にでも出かけてくるよ、

といった軽い雰囲気のリゼは少しぼかんとする。

「行って来ます！」

アッシュとジュニアの音が7:3の割合でハモって扉が閉められた。

すぐに訪れた静けさの中で、

暫く扉を見詰めていたキキが、

突然勢いよくリゼに振り返り笑顔を向けた。

「リつちゃん、大丈夫よ！」

あれでもあの二人最強だから！

ぱぱぱっと片付けて帰ってくるわ！」

「うん、そうね！」

ジキアの噂は私も知ってる位だし、

きつと大丈夫！」

「そうそう、大丈夫！」

「うん、大丈夫！」

ふふふふとお互いに笑って、

同時に椅子に座り込む。

キキはすぐさまパソコンに手をつけ、

二人との連絡を始めた。

リゼは何となく溜息を吐いて、

じつとその様子を眺めていた。

パソコンの向こうにいるキキはどんな表情をしているのだろうか  
と、

考えてみる。

(きつと同じよね……それでもやっぱり、不安なの)

リゼは今回がどんなに厳しい依頼なのかといったような事情は全く知らない。

しかし相手が魔物であるならそれはいつだって危険と隣り合わせなのだ。

一瞬にして全てを奪っていく、魔物とはそういう恐ろしい生き物なのだ。

それは誰よりもよく知っている。

「あ、りつちゃん！」

「え？」

キキがひよこつとパソコンの脇から顔を覗かせた。少し困った様な表情を浮かべている。

「今からちよつと仕事モードだから、

叫んだり焦らせたりする様な事喋るかもしれないけど、

これがいつもの退治屋のお仕事だからね！

心配しなくていいからね？」

「……うん、大丈夫よ」

「なら、良かった」

またパソコンの陰にキキの笑顔が消える。

退治屋の事を殆ど知らないリゼには、

それも考える必要のない事かもしれないと思えていた。

自分に出来る事があるならば、

キキと同じ様に信じて待っている事だけだろう。

それがきつと正しい方法なのだ、

リゼは三人の優しさを思いながら確信していた。



#### 第四章 “覚悟” が結ぶ点と塊4

空気がざわめく。

呼吸さえ許さないかのような張り詰めた空間に、突如それは現れた。

高々と生い茂る木々の更の上へ、

真っ黒い無数の固体が跳ね上がる。

その度に鈍く点滅する血のような赤い丸。

月の光が漆黒の波間にある明らかな殺意を反射させ、輝いたその瞬間に。

(相手はここだ!!)

それは一つの作戦として。

「リィガルス!!」

アッシュは膨大なエネルギーを悪夢の様な闇へと放った。  
が。

「!!」

月光に煌く数百という鋭利な物体が同時に

事も無げに振り上げられたのを見る。

刹那。

魔術は九十度方向転換して森の中で爆音を上げた。

(跳ね返した!!)

あまりに短絡過ぎる考えだったのか。  
始めにいくらか数を減らしたかったが想像以上だ。  
魔術が森に落ちた事がせめてもの幸運。

「ギアアアアアアアッ！！！」

攻撃の主に標的を変えたハウの群れが、  
もの凄い勢いで直下してくる。

聞いていた百という数字を遥かに越えた、  
まるで飽和状態の殺意が二人を飲み込んでしまつ寸前に、  
ジュニアの両手の術剣が発光していた。

「イギィゴルト！！！」

呪文と同時に剣で薙ながれた空間に現れた360度鉄のシールドへ、  
数百の術剣がぶつかった。

ガキイイインと金属の重なり合う音。

アッシュの右手にも術剣が握られ二人の呼吸が並んだ。  
瞬時にそれを感じて捉えたジュニアが、  
両手を交叉させ更に呪文を口にす。

「イギィフォン！！！」

今度は下方へ振られた剣から放たれた魔術が、  
鉄のシールド毎ハウを弾き飛ばした。  
連続動作でアッシュとジュニアが魔術で加速し走り出す。  
空中に飛散していたハウがすぐさま二手に分かれ襲いかかり、

再度激しく剣と剣のぶつかる音が闇に響き渡った。

「っ!!!」

アツシユは走りながら右手に握った術剣でホウの攻撃を受け、弾く。

一瞬の隙を利用して左手で魔術を放ち、確実に仕留めていく。そうしていながらも反対側からの攻撃を剣で受け、弾き、加速して距離を取り又魔術を放った。

辺りにはいくつか核が転がっているが、ざっと見ても十に満たない。

半分以上がジュニアによるものだった。

ジュニアは両手に持った剣をまるで体の一部であるかの様に、一般人の目には捉えられぬ速さで移動させている。アツシユよりも効率よくホウを斬っていた。

それでも二人とも三分と経たない内に息が上がる。

ここまで魔物一敏捷なホウと同等、

それ以上のスピードを維持しているのだ、当然である。

そこへ僅かにアツシユの呼吸が乱れた。

ホウの攻撃からの防御に間に合わず、

そのまま低姿勢で加速し何とかそれを避ける。が。

「ッ!!!」

切っ先がアツシユの腕を掠め、

焼ける様な痛みと同時に鮮血が滴った。

「ギアアアアアアアアッ!!」

好物の匂いに反応したホウが一斉に唸りを上げていた。

「アツシュ!!」

異変に気付いたジュニアが叫んだ時には、すでに全てのホウがアツシュへ、群がるように襲い掛かって行く所だった。

その後姿を目にして、

(間に合え!!)

「ツイギ!!ラン!!」

ジュニアは片手に統一された剣を斜めに振り下ろしていた。無数の術剣が空気を引き裂き、ジュニアに背を向けていたいくつかのホウに命中する。

「ギアアアアアアアアアッ!!!!」

大きな断末魔を上げ核へと変わるのを目にしつつ、ジュニアは走り出す。

また二手に分かれたホウの半分がジュニアへ飛び掛った。剣がぶつかり高らかに悲鳴を上げる。それは血の匂いを失った事を意味していた。

「ツクそ!!!!」

アツシユの眩きが微かに耳に入る。

(大丈夫だ)

ジュニアはまたリズムを取り戻す様にスピードを上げていた。アツシユは斬られたと分かった次の瞬間にジュニアの声を聞いた。反対の手で素早く癒すと、ジュニアの方から襲い掛かって来ていたホウが半分程核に変わっていた。

搾り出す様にスピードを増して攻撃を避け、体勢を立て直したアツシユはそう眩いていたのだ。

荒い呼吸と同時に汗が流れる。

二人のスピードはこれまでで最速の状態にあった。しかし戦闘開始からどれ程時間が経過したのか、ホウは一向に怯む事無く攻撃を続けてくる。とにかくスピード勝負である上に多勢に無勢、圧倒的に不利だ。

(これじゃ 埒が 明かねえっ ツー！)

フラストレーションの溜まっていたアツシユの中で何かが弾けた。突如動きを止めたアツシユへ激流の如く襲いかかる術剣。

(!?!? ア )

ジュニアがその異常なまでの変化を捉えた時、ホウの静止した標的への攻撃は空を切っていた。

同時に数メートル離れた位置で発生したのは巨大な魔術のエネルギー。

(?!)

ジュニアは高速移動を続けながらも咄嗟にシールドを張っていた。光の中心にいるのは、アツシュだ。

「ああああッ!」

叫びに呼応し激光を放つ術剣を全力で振り下ろした。

「　　ッギアアアアッ　　アアッ　　ッ　　ッ!」

刃と化した魔術が唸りを上げながら直進し一瞬にして全てのホウを薙いで行く。

(っ!)

防御しているとはいえジュニアも耐え切れず目を閉じる。真白な閃光と恐ろしい程の轟音に、対峙していたホウも怯んだのか数息の間。

「　　ギアアアアアアアッ!」

「くっ!」

まだ震える地を蹴り、

ジュニアは再び加速しつつ舌打ちをする。

あれ程の魔術を目の当たりにしても怯んだのは一瞬、それどころか眼球が更に紅を増しているのは気のせいではない。

(全滅　　しかないのか!)

咄嗟の判断で防御魔術を使ったジュニアの体力は最早限界に近かった。

避けて同時に攻撃する程の余力は皆無。

(くそっ      アツシュ      !!)

再度訪れた暗闇へ、バラバラと大量の核が散らばっていた。アツシュが仕留めた数は約五十。

「ハアツ！ ハアツ！ ツ……!!」

アツシュは肩で大きく息をしながら術剣を地に突き刺し体を支える。

限界を超えた巨大過ぎる魔術の連鎖。

これ程高レベルな魔術を操る者は片手でも余るほどしか存在しない。

操れなければ自身をも滅ぼしかねない、

恐ろしいエネルギーの放出なのだ。

今のアツシュにとって、

無意識の結果とはいえ賢いやり方ではなかった。

案の定、耐え切れず地に片膝を付いてしまう。

「くそッ……ッ……!!」

このままでは分散して来るであろうホウの餌食になるだけだ。頼みのジュニアも限界である事は容易に想像出来る。

(こいつらも普通じゃねえな

伝説魔物の影響ってわけか！ くそ!!)

毒吐くアツシユの視界に、  
未だ高速移動を続けるジュニアが数瞬ほど映る。

(三十)

口端を持ち上げ息を零す。

辛うじて術剣を握る手に力が込められた。

(ただでくたばってらんねえ )

大きく息を吸い込み、

「ジュニアアツ!!!」

言い慣れたその名を吐き出すと同時に、  
刀身を握り締めた掌を勢いよく滑らせていた。



#### 第四章 “覚悟” が結ぶ点と塊5

「痛ッ！」

よろけて前のめりに倒れ込むが、  
何とか両手を突いてそれ以上の負傷を免れる。  
ゆっくりと起き上がり両の掌を上向けた。

「いてえ……」

暗闇の所為で黒く見える血が薄ら滲んでいる。  
まるで酷い病に苦しむ人間の呼吸の様に、  
突如脈打ち出した傷口は、  
折角手当てを施して貰った傷にまで痛みを拡げた気がした。  
無理矢理押さえ込まれた不安にも似ている。  
きっかけがあればこうして波の様に溢れ出す。

「大丈夫……」

ぼつり、そんな風に零す。  
何故の呟きなにゆえなのかは彼自身きちんと理解していた筈だ。  
発声するだけで全ての痛みを忘れられるのなら、  
きっと自分は生きていけると。  
一人でも、大丈夫だと。

『おっさん、サニーは』

弱々しい問い掛けに返ったのは強い瞳。

『大丈夫だ』

心が震えた。

だから自分は決心出来たのだ。  
いつも一番に願っているのは、大切な妹の、幸せ。

『サニーを……お願いします』

少し驚いている風でもあった。

しかしそれはすぐに笑顔に変わり、

「ありがとう」という、

ロナが忘れそうになっていた単語が目の前に転がる。  
訳の分からない胸の痛みで表情が僅かに歪んだ。

『でも、条件がある。』

金は受け取らない代わりに、

おれはいつか金を貯めてあんたからまたサニーを取り戻す』

リチャード・ドネルセンの、

年を取っていないながらもその伶俐<sup>れいり</sup>で端正な表情が、

ロナの告げた条件を耳にし明らかに曇った。

「それでは損をするのは君ではないのか」と、  
きつとそう言いたいのだ。

分かっている。

単に強がりであるという事も。

それでもこれは譲れない、

サニーに対するロナの精一杯の償いなのだ。

決して人身売買などではないと、

いつか胸を張ってサニーに言える様に。

『おれは金はいらない。

これはサニーのためにすること。

金のためじゃない』

覚悟をして、瞳を上げた。

一人で生きていくならもっともっと悪くていい。

その方がいい。

『いつか迎えに来れる日まで、おれは、

サニーには会わない』

くすんだ瞳の色に映る、

もう何を聞いても動じないであろう優しい眼差しの男が、

しっかりとロナの瞳に向かって頷いた。

また、原因の分からない痛みが全身を駆け抜ける。

鼓動が速まり、

居ても立ってもいられなくなったロナは、

くるりと背を向け部屋を出、真っ直ぐ玄関を飛び出していた。

追いかける声もない。

これで良かったのだ。

自分を苦しめている罪悪感はずっとすぐに消える。

『サニー……ッ』

引き結んでいた筈の唇の隙間から、意識せずとも象かたどられる愛しいその名を零し、ロナは笑っていた。

「大丈夫。いつか迎えに行く。それまで、元気にいてくれ」

願いを込める様に呟き、どこまでも続く暗闇に向かって又歩き出していた。

どれくらい歩いたのか、見慣れたネオンの明かりがまだ数多く煌いているのが目に映る。まるで終わりのない闇はないのだと主張するかの様に。ロナは何となくほっと息を吐いた。そこからは目を閉じていても分かる、ガレージ倉庫への道。数時間前、サニーを背負って通った道だ。

今夜は不気味なほど月が明るいが、もしかしたら正しい道を照らし出してくれているのかもしれないと、ふと思う。

最後まで物事は分からないのだ。見かけで早々に判断を下してしまうのは、目の前まで来たチャンスを見す見す放棄するのと同じ事ではないのか？

どことなく前向きな自分に嘲笑を向けておいて、ロナは少し歩み

を速めた。

あの角を曲がればいつもの寢床がある。  
寢心地は最悪だがゆっくり休みたい。

そんな風に思って、辿り着いた倉庫内に向けた視線の先、  
飛び込んで来た光景にロナは瞬時にして体を凍りつかせた。  
ざっ、と血の引く音。

「あいつだアツ!!」

誰から発せられたのか分からない、  
とんでもなく恐ろしい叫びと同時に。

「殺せッ!!」

ロナは反射的に身体を反転し、  
今出せる限りの力で地面を蹴っていた。

何が何だか分からないまま。

また、暗闇へと。

「絶対に逃がすアツ!!」

全力で走っているのに背後からの声がこんなにも近い。

ロナは限界である筈の体を前へ前へと推し進め続けた。

ガレージで見たのは、

胸倉を掴み上げられた仲間の腫れ上がった顔。

地面にも数人転がっていた。

生きているのか死んでいるのか。

(殺されるッ!!)

止まれば、確実に。

追って来ているのは少なくとも、

ロナの属するグループの者ではない。  
テリトリー  
領地を侵したのか？

いったい、誰が？

信じられぬ思いばかりが込み上げる。

「はあっはあっ　　！！」

息苦しかった。

それでも、止まらない。

止まったら終わる。

(おれはなにもしていない！！)

心当たりが全くなかった。

追いかけられる理由は微塵も無い。

そうだ、況して殺される理由など、どこにも無い！

どこをどれだけ走ったのか、

自らの荒々しい呼吸音を聞きながらロナは無意識に進み続けている。  
る。

足元で枝の折れる音が微かに耳に入っても、

辺りが見慣れない場所であっても。

関係ない。

(なんでだっ……！？)

ロナは真っ直ぐ前だけを見詰めながら心の中で叫んでいた。

つい、数分前だ。

自分は何もかも放棄した。

ただ一人の愛しい存在からも離れ、

この身一つだけで良いと覚悟もした。

なのに何故？

もう何も無い自分に、生きることさえ許されないというのか？

「止まれアツ！！」

更に声が近くなっていた。

もう、限界だった。

「ハアツハアツハアツハ　ツア　　ツ！！」

足が纏<sup>もつ</sup>れて前のめりに傾く。

咄嗟に両手を前に突き出していたがそれが地面に触れる事はなかった。

「オラアツ！！」

怒声と共に腹部に鈍い衝撃を受けたかと思うと、

口ナは草の生い茂った地面を背中から勢いよく滑っていた。

「うぐアツ　　ツ！！」

今にも吐き出しそうな程の激痛。

本能がそうさせるのか、

焦点の合わない視線を必死に漂わせ、

尚も逃げなければ、と体に力を入れようとした。

「殺つちまえエ！！」

「ッ！！」

追い付いた数人が一斉に飛び掛かった。

一人が脇腹を蹴り上げ、ロナは再度地面へ沈み込むが、すぐに数人が両腕を引き上げるとロナを起立させた。

「ウラアッ！！」

耳障りな奇声を上げた少年の拳が左頬にめり込んだ。悲鳴を上げる間もなく次々と攻撃が浴びせられる。

「オラアッ！！ クソガキがアッ！！」

「ッ！！ ツ！！ ツグツ ゲホッ！！」

ロナは溜まらず血を吐いた。

それでも攻撃は止まない。

呼吸さえ出来ない。

右から左から正面から、絶え間なく暴行が続く。痛みと恐怖で狂いそうだった。

「ルールのツ分からねえアホはッ アアッ！ こうなるんだゼエ

ッ！！」

「うぐウッ！！ がはッ！！」

又、鮮血が地面を染める。

尤も、闇に同化して色など分からないのだが、

それはロナにしてみれば願ってもない事かもしれない。

恐怖を煽る要素が減るのはせめてもの救いだっただ。

ロナは“ルール”という言葉に疑問符を浮かべるも、段々と滲みゆく意識が急激に彼の中の全てのものを消し去って



くよつだった。

気付けば呻き声さえ、出なくなっていた。

(……ごめん、な……)

心の中でふと、そう呟く。

何に對して、

という問いすら、

最早意識の表層部分へは辿り着かなくなっていた。

未だ受け続けている筈の痛みももう感じない。

或いはこのまま、自分は。

(サニー)

そうして全てが途切れる数瞬に、

「うわああああッ!!」

それまでとは明らかに異なる悲鳴と、

厭味な程綺麗な月光に反射した数本の銀色を視界に映し。

いつの間にか解放されたロナの体は、

ただ重力が働く方向へと傾いていた。

#### 第四章 “覚悟” が結ぶ点と塊 6

勢いよく滑らせた右手を鮮血に染め、術剣が消失する。

「ッギアアアアアアアアツ アアアアアアアア ツ！！！！！！」

完全に力尽きたアツシユは支えを失って地面に倒れ込む。  
血の匂いに狂ったホウがアツシユへ群がって行くのを、  
ジュニアはしっかりと見据えていた。

(何やってやがる ！！！)

「イギ」

体力などもうどこにも残っていないというのに。  
それでも全力をその剣へ込める。

「ラン！！！」

振り下ろされた術剣から三十の刃。  
ホウの群れが標的へ辿り着く瞬間に、  
その背後を貫いていた。

(やったか！？)

しかし。

「！ギアアツ！！！」  
「なっ」

一匹が九十度方向を変え、  
的確な筈のジュニアの術を回避していた。  
見境を無くした真つ赤な眼球をぐるりと回し、  
そのまま真つ直ぐ向かった先は木々の生い茂る森のある方向。

「ギアアアアアアアアアアアッ！！」

（血がある？ 人 間に合わない ……ッ！？）

ジュニアの視線の片隅で人影が動いた。  
光に浮かび上がる見慣れた金色。

「うわああああッ！！」

茂みから複数の声が響くと同時に、  
術剣を振り上げた格好のホウを魔術球がすっぽり捉えた。  
そのまま空中を浮遊する。

「アッシュ」

ジュニアのその呟きには答えず、  
片膝を付いた姿勢で前に突き出している、  
血の滴る右手をぎゅっと握り締めた。  
ぱんつと弾けた魔術球から核が一つ、地面へ落ちる。

「……………おわり、だなっ……………」

掠れ声でそう呟くと、アッシュは体を地へ投げ出していた。  
二人の呼吸音だけが聞こえる静寂へジュニアも身を沈める。

激闘の余韻を噛み締めるかのような重々しい沈黙が辺りを支配し、二人は暫くそのままで居た。  
が、ふと、ジュニアが視線をアッシュの方へ向かわせ、問う。

「……右手、平気か」

「……ん、ああ、もう癒した」

作戦  だっただのかどうか、  
今となつてはよく分からないが、

ジュニアは内心無茶苦茶だと思わざるを得ない。

アッシュ自身でさえ限界だったのだ。

それであるのにまだ魔術を放てる体力がこちらに残っていると考  
えるのは、

どう考えても可笑しい。

(……へんな奴だよ)

微かに、口の端を上げて微笑を浮かべた。

(分かっているのか、アッシュ)

たとえ限界にあつたとしても、溢れてくる力があるという事。

(分かっているんだ、お前は)

アッシュがそうしていなければこの勝負、きつと負けていた。

こんなにもギリギリの戦いをしておいて言う言葉ではないのかも  
しれないが、

ジュニアは表現のし難い心地よさを感じていた。

「ああ、そう言えば……」

「一つ、気になる事があるんだが……」

「？ 何？」

「さっき、倒れてから、どうして魔術を」

ジュニアの言葉の途中で、

ふとアツシュが半身を起こし一点を凝視し始めた。

同じ様に起き上がったジュニアが視線の先を追うと、

そこには月光も届かない黒い森が広がっているだけである。

「どうした？」

問うてみるが返事はない。

しかし、暫くして「誰がいる」とアツシュが零し、

立ち上がった二人はゆつくりとその森へと足を踏み入れた。

踏み入って、すぐである。

「！」

地面に仰向けに倒れている子どもがいた。

見た感じでは少年。

しかし。

「ひでえなこれ……生きてんのか？」

「さっきの声はこの子か？ 流血も酷いな。」

道理で、ホウが嗅ぎ付けたわけか」

小さく痩せ細った手を取り、

脈を調べていたアツシュが「生きてる」と呟く。

しかし、疲労しているとはいえ、

アツシュにも微かにしか捉えられない程気が弱ってしまったているのは事実である。

発見されないままなら朝を待たずに死んでいただろう。

「運がいいなお前。よつと、」

少年を軽々と担ぎ上げたアツシュは、ジュニアを促し歩き出す。どれくらい時間が経ったのかはつきりとは分からない。しかしきつと、あと数時間もすれば夜が明けるだろう。

「……………あ、俺だけど、今　　ッ！！！！！」

小型通信機を器用に、思いっきり耳から遠ざけ、ジュニアが顔を顰めた。

装着していないアツシュの耳にも届いたのが、複雑に顔を歪める。

「あいつ……………今怒るとこじやないだろ、普通……………」

二人は程無くにやりと一笑し、通信を切ってやった。

「さあ〜帰ったら寝るぞ！」

“こいつ” にキキ押し付けて寝るぞ俺は！」

そう声を上げたアツシュの背に凭れ掛かる少年が、何となく身じろいだ様な気がした。

苦笑するしかないジュニアの温かい手を背に受け、少年も夜明けを待つ。

全てが目覚める、その時を。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と1

どうして母は出て行ったのだったか、そんなことをずっと考えていた。

どうして、というのは理由を問うものではなく、どうやってと方法を問う疑問形。

出て行ったという事実だけが残り、そのあるべき場面がすっぽりと抜けている。

いくら記憶を辿って行こうと得られる事のない答えだった。

今からだいたい一年とちょっと前の記憶のあちこちには、まだ母がいる。

そしてどれも、笑っている。

まさか出て行くなど思い至らないほどに、

どんな時も笑っていた。

だから信じられなかった。

突然過ぎて、理解が出来なかった。

あんなにも笑っていたのに？

(笑顔でいたことが、邪魔をしたんだ。

おれはちゃんと安心しきってた。

ちゃんと……騙されていた)

どれもこれも不自然なのだ。

あれだけ長い年月で一つの感情しかないなど、ありえないのに。

だから、それまでは、幸せだった。

何も、懼れなどなかった。

感じていたのは温かさだけだった。

それが、巧妙に仕組まれた偽物だと気付かなかったから。

(いらなかったよ。そんなものなら、

はじめからなければよかった！)

出て行く事を、いつから決めていたのかそれは知る由もない。

しかし、もしもそのために笑っていたのであればとんだ偽善だ。

思い出だけでも美しく？

そう考えたのなら自己満足以外の何ものでもない。

その間違った行為は自分に苦痛しか与えてはくれないのだから。

しかも、甘く、輝かしいほど、それは鋭く牙をむく。

すべてが嘘だ。

目に映るなにもかもが自分を騙している。

絶対などない。

信じて疑わない自分を、すべてが嘲笑っている！

幼い自分にとって、

絶対であった母が忽然と消えた日から、

口ナにはちゃんと分かっていたのだ。

純粹でなどいられないと。

そうあってはならないと。

生きるために。

(分かっていたのに。分かっていたのに。



……なんで、あきらめた……？)

側で微笑む何かに、救われていたはずだった。

一人ではないという安堵があった。

でも、それも、もういい。

もういない。

迷いは、ない。

行くべきところへ行くだけ。

責められはしない。

なぜなら、それは当然の権利なのだ。

人間に等しく与えられた、何者にも犯されない。

生きるための。

\*\*\*

ロナが目覚めたのは事件から丸二日経った昼間である。

瞳ひとみを開けて、一番に目に入って来たのは、

見慣れない模様をした天井だった。

それを視界に入れても、

まずそこが部屋の中だと気付くのには更なる時間を要した。

閉め切つてあるためか周囲の薄暗さが途切れた記憶の断片を呼び

起し、

様々なことが一瞬にして脳裏を過って行く……………

悲鳴      リンチ      追手

サニー      高熱      痛み      熱さ      刃物      月

“死”

「うああああっ      っ！！」

がばっ、とロナは悲鳴と共に勢いよく、上半身を跳ね上がさせた。

同時に全身に鈍い痛みを覚え、

すぐに体を丸めるように小さくなると呻き声を洩らす。

体のあちこちが痛みを訴える。

まだ傷口は完全には塞がっていないのだと。

無理に体を動かすなど、そう訴えている。

痛みでもって、ロナの思考へ。

「……………あ」

ふと気が付いて、呟くように声を発していた。

痛み、があることに驚いた。

自分は死んだのだとばかり思っていた。

中途半端に記憶が途切れるその一瞬に、

自分は確かに悟っていたのだ。

呆然と、悔しさと、恐怖の中で、それを。

「たす、かつ、た……………？」

確信が持てずに語尾が僅かに上向いた。  
いくら思い出そうとしても、

今ここにある現状へ結びつきそうなものは何一つない。  
顔を上げ、周囲を見渡してみても、  
やはり見知ったものは皆無だった。

質素な部屋である。

自分が今寝ていたシングルベッド。

そこまで大きなないクローゼットに、  
何やら後付け感のある布で区切られたスペース、  
そして、部屋の広さや配置などを完全に無視している、  
不自然な簡易ベッド。

(せまい部屋にふたり? ……それとももつと大勢)

無意識にそう判断を下す。

ストリートでの生活が、

たかだか十歳の子どもにも具え持つ事を強制した最低限の能力だ。  
そしてそれは又、ロナに視線を廻らせ、  
金目の物がないかを探させる。

まるで至極当然と言わんばかりに、不遜な振る舞いで。

しかしどれだけ目を凝らして視線を往復させたところで、  
価値のありそうな代物はなかった。

はぁ、と溜息を吐いて眉間に皺を寄せる。

(すつげえビンボーかよ? ほんとなんにもない)

今の自分の境遇は最も安全であると つまり偶然にも真夜中の、  
しかも人の寄り付かない森の中に居合わせた “誰か” が、

“好意” で自分を救ってくれたと、  
そんな奇跡を仮定するとして、  
ロナはそれでもついもつとましな家に目覚めたかったよな、  
と思わずにいられない。

或いは新手の空き巣対策かとも思ってみるが、  
ここまで生活に影響を与えてはむしろ滑稽過ぎる。

ロナは純粹に “ヘン” だなと感じていた。  
こんな部屋も、きつと住人たちも。

そう想像したものの、  
すぐさま自嘲的な笑みを口元に浮かべる。  
始めから “ヘン” じゃないことなど、

この状況ではすでに期待出来ないと感じいたからだ。  
奇跡的仮定など、その発想すら馬鹿げている。

ロナは体を引きずる様にしてベッドの端に移動し、  
背凭れに寄りかかる。

自力で身を起こしているよりは格段に楽だ。  
力を抜き、ほっと吐息して、  
そのままぼーっと前方を見詰めた。

部屋は相変わらず薄暗かったが、  
締め切られた窓からは外の光が漏れている。

良い天気なのだろうか。

小鳥が忙しなく囀っているのが、  
微かにロナの耳に届いた。

(……………どうしようか?)

ぼつんと浮かんだ言葉は、

自身でも意外なほど無気力なものだった。  
どうするもこうするも、  
体が動かないのでは話にならない。  
愚問、というやつである。  
とにかく早々にここから立ち去るべきだ。  
抜け出す方法は住人の善し悪しを見極めてから考えよう。  
そう、大まかな結論を出す。

その時だ。

扉の外で物音がした。

どこかのドアが開かれる音に続いて足音、  
そして、声。

内容までは聞き取れなかったが音の高低から若い女だと分かった。  
近付いては遠のく足音と声に神経を集中させながら、  
ロナはゆっくりとベッドに潜り込み、息を潜める。  
部屋を覗かれた時に自分にはまだ意識がないと思わせておく方が、  
とりあえずは安全だと判断したためだ。  
案の定、声が急激に近くなった。  
きゅっ、とロナは固く目を閉じる。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と2

「えーとね、キッチンの棚に あ、一番目に そうそう」

(もうひとりいるのか?)

誰かと会話をしているようだった。

耳を澄ませそうとした所へ、こんこん、と戸を叩く音。

しかし同時に扉を開けられ声の主が入室して来る。

少々焦り、なんのためのノックだよ、とロナは内心毒付いた。

「入るわよーって、もう入ってるけど」

一人で言っている。

おかしなオンナだ。

自分が子どもだからなめられているのかもしれない。

「さて、体調はどうかなー……ん？」

「……………」

突如、女が無言になった。

上から顔を覗き込まれるような、

視線による圧迫感に耐えながら、

ロナは寝返りを打って顔を逸らしてしまいたいという衝動に駆られる。

「……………」  
「……………」

いつまで見てる気だ！

さつさとあっちへ行け！

脂汗が噴出しそうなほど緊張を覚え、心の中で罵る。

そんな内心の格闘がすべて表情へ現れているとは露知らず、

口ナはさらにきつく目を合わせた。

一方の声の主であるキキはというと、

タヌキ寝入りが失敗しているその可愛いらしい様子に、

必死で笑いを堪えている所だった。今にも噴出してしまいそうだ。

「……………」

「……………」

お互いがそれぞれの理由で沈黙を持って余し、

それが極点に達しようとした時。

こんこん、と、半分開け放してある戸を叩いてリゼが顔を出した。

「キキさん、その子の調子はどう？」

「リつ……………ちゃんっ……………」

キキの声が裏返った。

しかもとてつもなく妙な顔つきになっている。

「？」

状況が読めずに首を傾げているリゼへ、

キキが小刻みに手招きをした。

促されるままベッド脇に近寄り、

キキの指し示す方向へ視線をやると。

「あ……………」

思わず発声しそうになって何とかおしとどまる。  
痙攣したようにぴくぴく動いている瞼。

何のためかは分からないが可愛い寝た振りだとリゼも思った。

すでに喉の奥の方で笑い声を洩らしているキキに視線を移すよりも早く、

耐え切れなくなったのかロナの方が身じろぎし、  
とうとう目を開いた。

二人と視線が合う。

「あ、目が覚めた？」

「……なんか、こそこそうるさくて」

そのこそこそうるさくされた原因を知らないロナは、  
尤もらしく目覚めた理由を述べる。

リゼは苦笑するしかなかった。

しかしキキにとってその返答もツボだったのか、  
笑いを飲み込むとぱっと顔を上げ、

「まあいいわ！ 可愛いから許しちゃう！」

と、にこやかに言った。

そんなキキの言葉にしかめっ面になって、  
クエスチヨンマークを三つくらい飛ばしたロナの反応はきつと正しい。

実際何も悪事を働いていないのだから、

許すも許さないもないのであるが、

キキのは単に勢いらしかった。

そこに文字通りの意味は殆ど無い。

呼吸を整えるために大きく息を吐いて、



さて、とキキが呟く。

「体調はどう？ まだ完璧じゃないとは思っけど、大分いいでしょ？」

言いながらロナの包帯だらけの体に触れようと手を伸ばすが、極度に拒絶されてしまう。  
冷たい瞳がキキを仰いだ。

「……あなた、信用できんのか？」

「……そうねえ、まあこんな世の中だし、信用してって言う方が逆に怪しいかもしれないけど、」

いったん言葉を切り、優しさに溢れた笑みを湛えて、

「私がキミをとって食べちゃうような鬼婆おにばばに見える??？」

見えないでしょう？

という意味の反語形式で安全性を伝えたつもりだ。しかし。

「見える」

にべもない断言に、

「このガキヤー!!!」と、

言葉通りの鬼婆に成り下がるキキであった。

「お、落ち着いてキキさんっ！

えーと、あ、あなたの名前はなんていうの？  
まだ聞いてなかったわ」

「……なまえ、」

「そう、名前。なんて呼んだらいい？」

すとん、としゃがみ込んで目線を合わせたリゼが言う。

「……………」

この時ロナは、リゼを屈託無く笑うオンナだと思った。

『君達の名前は何と言った？』

あの男もそうして微笑って問うたのだった。

こんな人間でも 社会から淘汰された失格者でも、名前を。

「…………ロナ」

自然と口が動いた。

迷いが完全に無かったわけではない。

偽名を使っても良かった。

その方がもしかしたら安全だった。

すべて分かっている。

理解している。

頭の中では。

「ロナくん？ 私はリゼ。よろしくね」

また、何の疑いも無い笑顔が向けられる。

先程の鬼婆の表情も今はすっかり緩んで、

「私はキキ。キミの怪我の治療をしたのも私。」

それが特技なの。だから大人しく看病されなさいね、ロナ？」

温かく、そう言った。

「……けっ」

ロナの横でぷちん、と音が聞こえた。

「このガキヤー！！」

鬼婆再来。

「おお落ち着いてキキさんっ！

……えーと、あ、そうだわ！

ロナくん、お腹空いてるでしょう？

ミルクは飲める？

キキさんが作った元気になるシリアルがあるから、

食べてみて。ね？」

リゼが入って来た時にすでに準備されていた

“体力回復用シリアル” がベッド脇にセットされる。  
どう見ても普通のシリアルであるが。

「あやしい」

「おいしいのよ。」

体だけじゃなくても心も元気になれるから、

試してみない？ 少し体起こせる？」

ずっと横になったままのロナにリゼの手が触れる。

一瞬全身を強張らせたが、

驚く事にすぐに無抵抗になる自分がいた。

二人が入室する前と同じ姿勢になってほっと息を吐く。

手にした皿を見詰めていると空腹感が倍増した。

一口食べてみて、ほんの少しきよとんとする。

意外に悪くない味。

子どもが好みそうな強めの甘味はまた、

ロナの体が一番欲するものだった様だ。

後は本能のまま、呼吸も忘れて貪<sup>むさ</sup>った。

「お腹が空いていたのね。」

それだけ食欲があるなら、

夜はちゃんとした食事できそうかな」

少しも変わらぬ穏やかな表情でリゼが言う。

ロナはあつという間に空にした皿を乱暴な動作で突き出し手渡す

と、

また痛み始めた体を布団の中に潜り込ませた。

顔は反対側へそむけている。

「ロナくん、寝るの？」

当然の如く降ってきた言葉が。

痛みを拡げる。

気持ち悪い。

(やっぱり食べなきゃよかった)

ろくなモノではなかったのだ。

きつとそつだ。

そう、思いつくとする。

「ロナくん？」

「……でって」

これ以上そうしていたら、おかしくなりそうだった。  
何もかも吐き出してしまふ気がした。

「で、てって……」

「え？ なに」

「でてけ！！」

それだけは。

「……………」

束の間の沈黙が降りた。

気配が少し動く。

「分かった。ゆっくり休んで。

また様子を見にくるね」

リゼの声。

そのまま木の軋む音と共に二人分の気配が扉の外に消えた。  
振り返って確認して、やっと大きく息を吐く。

(きもちわるい……あたまがいたい)

乱れをもたらすものが何であるか、  
それは明らかだった。

笑顔が　リゼの屈託の無い笑顔が、  
あまりにも似過ぎてているのだ。  
記憶から消し去りたいだけの、忌々しいそれと。

(おにばばだ……あいつもおにばばだからだ)

何もかもを真っ白にしてしまっ、  
恐ろしい誘惑に負けるわけにはいかないのだ。  
自分にはやるべき事があると、そう言い聞かせる。  
動けるようになったら、  
現金か金になりそうな物を物色してさっさと出て行く  
それがロナの、唯一の生きる道なのだから。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と3

久しぶりの依頼退治として出かけた先は住宅街の、あるアパートの一室だった。

無造作に住所が書き殴られた紙切れを片手に、狭く薄暗いコンクリートの階段を登る退治屋二人の心境は、まるで配水管修理にでも出向くかのような妙なものだ。しかし、二日前の死闘を思えば、そう感じてしまうのも仕方のない事かもしれない。

「この階だ、アッシュ」

先に階段を登りきったジュニアが背後を振り返った。  
二、三步後方にいたアッシュも平らな地に足を付け、きよろきよろと辺りを見回す。

「何号室だったっけ？」

「不吉な番号が並列してる部屋」

「じゃあ77？ それとも7777？」

「……とても言いにくいんだが、

それは一般的にラッキー番号だったと思うぞ」

「……まあ、色んな説があるって言うだろ……」。

で、何号室？」

「1313」

言いながらジュニアは方向を指し示す。

そちらへ足を向けつつ、「すつごく不吉な予感だなっ」と、アッシュが一人こちた。

時々アツシユは可笑しな、というか、  
一般的ではない “常識” を真剣に口にすることがある。  
どれも取るに足らないものなので気にすることはないのかもしれないが、  
どこでどうやって覚えたのかジュニアには少しだけ興味があった。  
なぜならアツシユは一見適当そうに見えて実は賢い。  
そうでなければいくら実技が人並み外れて秀れていたとしても、  
魔術学校を主席で卒業することは出来ないからだ。

そんなどちらかと言えば理論的な思考の持ち主であるはずのアツシユに、  
いかにも “常識” として信じ込ませることが出来る存在は、  
彼にとつて余程信頼の置ける相手か、  
尊敬に値する人間だからではないかとジュニアは見ている。  
比較的高確率なのが彼の両親、であるが、  
改まって話題にするにはあまりにも些細な事のような気がするし、  
アツシユの口から飛び出すのに前触れがあるわけでもないので、  
何かと尋ねる機会を逸しており、未だ想像の範疇を超えないでいた。

とは言え今回の “常識” 不吉ナンバーに関しては、  
確かに背景とする文化が色濃く反映されるので、  
アツシユの咄嗟の言い訳にしては的を射ていると言える。

「1312……えーと、131……4？  
あれ？ 13が無い」

ふと、足を止めてアツシユが首を傾げた。  
ジュニアの思考は素早く現実へと切り替わり、  
前方に目をやると、確かに番号が飛んでいる。



「……この部屋……番号がないな」

「てことはここが1313号室ってことか？」

お互いに顔を見合わせた後、

アツシユがその番号の無い部屋のドアを三回ノックした。

「こんにちはー。依頼もらったジキアですけど」

声をかけるが返事はない。

反応のない依頼人の家、というシチュエーションには、

二人はすでに動じなくなっている。

なぜなら経験上、

こつした家屋内での退治依頼にはるくなものが無く、

すでに反応が出来なくなる程緊急を要するものが殆どだからだ。

魔物が家屋にまで侵入するにはそれなりの訳があり、

大抵それは人間側が禍の元である場合が多い。

二人は黙ってきつちり一分間待った後、

「強行突破」と呟いてアツシユが魔術で扉をこじ開けた。

内側に扉が開き、薄暗い室内が視界に入る。

「入りますよー……ってうわっ！！

何だこれっ!？」

途端、先に足を踏み入れたアツシユが悲鳴を上げた。

「どつした？」

ジュニアが問いつつ歩みを進めると、

全身が何かにぶつかる。

カランコロンと乾いた音を奏でるそれらを一目見て、  
ジュニアも悲鳴を上げそうになった。

「っ……何だ、これは」

そこにあつたのは、無数に吊るされた多種多様の骸骨と、  
足の踏み場も無いほどに散らかった、よく分からない物、だった。

「これは単なる趣味か、それともアレか？  
想像したくない方の」

言いつつそれを想像してしまったのかアッシュが舌打ちする。

「依頼内容不明って、そういうことかよ」

手のひらの、住所だけが記された紙切れを握り締め、  
踏み込んだ暗闇に放り投げた。

「いくぞ」

「……………」

アッシュの深く集中した瞳を見つけ、  
ジュニアも戦闘体制を取る。  
静かに現れた術剣を握った。

退治依頼は突然だった。

それを受けたキキによれば、依頼主はどうかやら男。  
ひどく慌てた様子で、魔物が来るからここに、  
と住所を言ったきり通話が途切れたそうだ。

そうして深く思考せずとにかく駆けつけてみたのだが、  
事態は思わぬ方向に転がりそうである。

二人は一步一步暗がりを目を凝らし前進する。  
が、中からは何一つ物音がしない。  
魔物の気配もない。

(畏?)

その可能性は否定出来なかった。

「！」

突然、アツシュが神経を張り詰め背後を振り返った。  
ジュニアは反射的にその反対側へ術剣を構え、問う。

「いたのか？」

「……いや、違う、魔物じゃない」

「依頼主？」

「分からない……気のせいか……？」

扉は開け放したままだが、

そこに室内の視界を良くする手助けになるほどの光源はなかった。  
外を凝視するアツシュの目に無機質なコンクリートだけが映る。

「アツシュ！」

背後からの硬い声に弾けるようにして室内へ視線を戻すと、  
ジュニアが何かを発見したのか前方を指差していた。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と4

暗闇に目が慣れないままのアツシユは舌打ちする。

「くそつ、何にも見えねえ……魔物、の気配はないな。置物か？」

「分からないが、畏かもしれないな」

「こつ動けないんじゃない何しにきたんだか！とにかく明かりだ。窓を開けるぞ」

「了解」

衝撃で魔物が動き出しても仕留められるよう、ジユニアが集中を高める。

アツシユが呪文を口にした。

がしゃんと派手な音を立てて窓が吹き飛び、

一気に外の明かりが入り込む。

急な光源に一瞬だけ目を閉じた後、

開いた目に映ったのは石の塊りだった。

しかも、人の形をしている奇妙な石。

二人は危険がないと判断して、石に歩み寄った。

「なんだこれは……彫つたにしてはやけに生きているみたいだ」

「なんか気持ち悪い……この吊つてあるやつも石も、これやっぱ本物なんじゃねえの？」

苦い顔でアツシユが石に触れた。

途端、人間の形をした石がなんと本物の人間になった。

「　　ツツツ！！！！」

声にならない悲鳴を上げて、  
逆に固まったアツシユとジュニアの目の前で、  
石だった男はがたあんと勢い良く後ろの本棚に激突し床に倒れ  
る。

本棚からは雪崩のように分厚い本が男の上に落ちていった。

「　　いい痛たたた……っ！！」

暫く床で唸り、何とか顔面の本を自力でよけると、  
開けた視界に見知らぬ男が二人青ざめた表情でこちらを見ていた。  
男の血の気がさつと失せる。

「　　ううわあああああつっ！！  
すみませんすみません勘弁して下さいっ！！」

本に埋まったまま手足をばたつかせ暴れていたが、  
一向に襲われる気配がない。  
再度そーっと目を開くと、先ほどと同じ男たちが、  
先ほどと同じ姿勢のままこちらを凝視している。  
男は、はっと我に返った。

「　　も、もしかして、退治屋さん……？」

「　　……あなた……人間、か？」

またお互い沈黙した。

が、床に倒れている男が何かを確信したようにほーっと長い息を  
吐くと、

どさどさと本の中から半身を起す。

「痛たたた……ああ、すみません、驚かせたみたいで。  
チーム・ジキアの方々ですよね？」

「どうやら私、助かったみたいです、あはは」

「……あ、あははじゃねえこのやるー！」

「マ・ジ・で！　びびったっつーのー！！」

「す、すみません……。私も、あ、ははは、はは、

びびりましたあー……。あははは」

「~~~~~」

人間恐怖も極限に達すると笑いたくなるらしい。

ジュニアと顔を見合わせたアツシユは二人して大きく嘆息した。

三人は部屋の中央に据えてある、すでに物置と化し、

向かい合って座ればお互いの顔が見えなくなるテーブルに座る。

依頼主は「すみません」と申し訳無さそうに呟き、

無造作にテーブル上の書類や器具などを部屋の端に押しやった。

「何か特別な意味があるのでしょうか。

この部屋には見慣れない物が多いようで……」

ジュニアが言ったのは部屋に無数に吊るしてあるあの骸骨のことだ。

床に転がっていたのもその類の置物だった。

男は苦笑を浮かべてそちらに視線をやる。

「あれらは全部雰囲気作りです。気持ち悪いですよねえ。

でも安心して下さい、本物ではありませんから」

「雰囲気ねえ……。まあ、個人の趣味をとやかく言わねえけど」

「ははは、趣味、ですか」

男はずっと手に持っていた眼鏡を装着しながら曖昧に笑う。

「そうとも言えるかもしれませぬ……見方によっては」  
「……と、いうのは？」

フレームの付いていない眼鏡のレンズに大きな傷が付いていた。  
掛けてはみたものの邪魔でしかないため、すぐに抜き去る。  
そして改めてアッシュとジュニアに視線を向け、言った。

「実は私、“悪魔研究”をしているんですよ。  
悪魔と言えば、骸骨でしょう？」

「「っ悪魔あ!?!」」

予想外の単語に二人はタイミングをきれいに揃えて反問していた。  
そういう研究分野が存在するということは知識として持ち合わせていたが、

アッシュもジュニアも世間一般にとっても、  
それは嘲笑の対象でしかないものだ。

「分かっています。悪魔なんて単なる抽象概念に過ぎない、  
そんなもの存在しない、それが常識です。  
ですが、絶対に無いのだと証明出来ない限り、  
一パーセントほどでも可能性はあり続けるんです。  
古代の歴史書にもいくつか悪魔についての記述が見られますしね。  
もしも否定的な結論が出てしまったとしても、  
それはそれで成功でしょうから大いに意義のある研究だと私は思  
っていますよ」

饒舌になって語る男は、終始笑顔を貼り付けていた。  
生来そういう顔つきである可能性は高いが、

いかにも研究者然としている者が語るよりも現実味があると、密かにジュニアは思ってみる。

悪魔どうこうを抜きにしたら共感できる部分は少なくない。

「でも、今日もまた失敗しました、はは……」

なかなか、上手くはいかないものです……」

「あんたさあ、研究つて一体どんなことしてんの？」

まさかとは思うけど、悪魔召喚、とか？」

早々に椅子から立ち上がって部屋の中を徘徊していたアッシュが、最もあり得なさそうな事を問うた。

だが男はあっさり頷いてみせる。

「その通りです。召喚してみても悪魔が現れれば、

それ以上の存在を証明する証拠は他にないでしょう？

問題なのは召喚呪文なんです。解読がはかどらない。

今日もこれだ、と思って試してみましたが案の定……」。

専門書にある呪文は古文と似ているようで全く違う、

悪魔の文字なんですよ」

「悪魔の文字……そんなものが存在するんですか？」

ジュニアにはどうしても信じられない。

悪魔の文字であると思いついてはいるだけではないかと、

そう問いたいのが本音だ。

「これ？ 専門書？」

山積みになっている本の中から、  
煤けた一冊を手に取りアッシュが言う。



「ああ、それです。よく分かりましたね」

男は何となく嬉しそうだった。

アツシユの態度を肯定的に捉えたのかもしれない。

ペラペラと頁を捲る様子を静かに見守っていた男とジュニアに、文字が見える距離ではないがアツシユはある頁を開いて見せた。

「ここ？ その、悪魔の文字が載ってるトコ。  
五百三十七頁」

「おお！ そんなにすらすら古文が読めるなんて、  
あなたももしかや学者ですか！？」

「いや退治屋だ」

「……知らなかった。いつから悪魔研究始めてたんだアツシユ？  
「研究なんかするかよ。興味もない。」

ただ古代書はよく読んでたから慣れてるだけだ。

一応必修だったろ、学生ん時」

「……ああ、忘れてた。お前は普通じゃなかったんだよな」

「褒めてんのかそれは。必要に迫られてたつてことだよ。」

「じゃなきゃ古文なんて退屈だろ、どう考えても」

言いつつ瞳は文字を追っている。

その速度に合わせて人差し指が文字上を滑った。

それを見ている、アツシユが困難なく古文を読めるということが分かる。

「おっさん、俺は、悪魔なんて信じてないけど……」

「でも、いると信じたら、いるんじゃないかな……」

「……………」

おっさん、と急に言われたから返答に困ったわけではない。

あまりにも向けられた言葉が抽象的で、咀嚼するのに時間を要したのだ。

真剣に考え込む男を横目に、ジュニアが短く溜息を吐く。

「アツシユ、訳の分からないことを言うな。

どうせ深い意味はないんだろう?」

「え? 何が?」

「え、ないんですか? あー、私はてつきり、深い言葉だと。

あははは」

そこは必ずしも笑う所ではないのだが、男のはどうやら癖のようだった。

「ん、あった。ここか。確かに、古文みたくで全然違う文字だな。

俺にも読めない。……うーん。たった一文だけど確かに厄介だな」

「呪文らしき文字の解読が進まないのは、

それに関する記述が残っていないからでして。

古文を応用して試行錯誤を繰り返すのですが、限界を感じますね

……」

つまりは、悪魔や召喚に関する記載はあっても、

文字やら呪文やらの記録は皆無ということになる。

それが何を意味するのか、可能性の一つに男も気付いているはずだ。

要はどちらに転がるかだ。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と5

アッシュはその分厚い専門書をばたん、と閉じた。かなり古い本のためか、目に見えて埃が舞った。

「ところでおっさん、ここからは本題だ。

聞きたいことは二つ。石になってたのはなぜか？  
どうして俺たちを呼んだのか」

「……ああ」

比較的研究者の好む、その簡潔明快な問いかけに、高揚を滲ませた瞳を細めて軽く首肯する。

「実験はこれで何回目でしょうか。

それだけ失敗を繰り返してきたわけですけど、

その、なぜか時々、魔物を呼び寄せてしまうんですね……」

「例えば？」

少々もったいぶった答え方をするのが気になっていた。

が、それ以上に魔物を呼び寄せるとい言葉が引っかかる。

「例えば、そうですねえ、

ある時なんかはこう、召喚実験の真つ最中に、

窓の外に鳥のような獣がわくわくと群がったりなんかして

って窓！？ 割れてますね派手に！？ えーっ一体何が！？」

「あーっと、おっさん！ 話の途中だ」

「ごほん、と奇妙な咳払いをして、

ガラスのなくなった窓枠を凝視する依頼主の視線をこちらへと引

き戻す。

研究者というのはいつの時代も貧しいものだ。

男は今にも泣き出しそうなほど困惑した顔で、

「ガラス代高いのになあ。何でかなあ」とぶつぶつ零しながら、なぜかジュニアに同意を求めた。

ジュニアは気まずそうにしながら、

「已むを得なかったといえど立派な過失に謝罪の言葉を口にしかける。」

しかしそれよりも早く、また、

「ごほん、と咳払いをしたアツシュが白々しく、

「泣くなよ。何で割れたかなんて知らねえけど、

あとで俺が直してやるから！」

と、言い放った。

「ほんとですか！？ ありがとうございます！！

助かります！！ あなたいい人だあ！！」

「ああ、まあね……」

「……………」

表現の仕様のないジュニアの瞳とぶつかり、

アツシュは慌てて話題を元に戻す。

「で？ ……なんだっけ？」

「……えーと、なんでしたっけ？」

「あーもういいや！ だから、何で俺らを呼んだんだってことだよ」

「あ、そうでしたね。」

ですから、実験に失敗したら何が起こるか分からないので、

今回は念のために依頼させてもらいました。  
でもそのおかげで助かりましたから。  
あはは、やっぱり魔物だったのか」

「？ 何のことだ？」

またもや予期せぬところで飛び出た 「魔物」 という単語に、  
今度は明らかにアツシユの顔が曇る。

「魔物ってどういうことだ？」

この部屋で俺たちは魔物なんて見ていない」

「え？ でも私……生きてますよね？ え？ え？」

どういうことですか？ 生きて……る？」

「生きてる。…… “このへん” 無事かどうかは保障しがたい  
けどな」

自らの側頭部へ人差し指を向け、くるくると宙を二回転させる。  
その動作の意味を察し、男ははにかんだように笑った。

「笑うとこじゃねーよ……ほんと大丈夫かおっさん？」

「??? 何がです？」

アツシユは深々と嘆息した。

会話が全くかみ合っていない。

故意なのか、それとも単なる天然か？

俄にわかに頭を抱えたアツシユは、

とうとうジュニアへ無言の救援を求めた。

いつもの如く静かに状況を見守っていたジュニアだったが、  
彼の中で両者の論点はしっかりと把握出来ていた。

「少し話は戻りますが、いいですか？」

男が相変わらずの表情で頷くのを見て後、  
ゆっくりと口を開く。

「私たちがここへ来て一番初めに会ったものは、  
なぜか石になっていたあなたでした。  
魔物の姿どころか気配すら一切感じられず、  
仮に“いた”のだとしても、その痕跡すら見当たりません。  
ですが、あなたの口ぶりは魔物がいたと断言しているように聞こえます」

瞳は真っ直ぐ、男に向けられている。  
僅かな変化をも読み取ろうという姿勢だ。

だが。

「つまり、魔物がいたのかいなかったのか、  
それを明らかにしたいということですね？」

男はぼん、と手を叩き、合点がいったというように一人頷いた。  
悪意は微塵も感じられない、ごく自然な表情と声のトーン。

(嘘を吐いているようには見えない……)

先ほどから感じる妙な違和感は、  
曖昧なまま霧散していきそうになった。  
ジュニアは軽く首肯し、

「そついうことです」

と、簡潔に結論を口にする。

男もまたにこりと笑って、寝癖だらけの頭を掻いた。

「そうですか……おかしいなあ。

確かに私は魔物だと思ったんですけど……

というか、でなければあれはいったい何なのでしょうね？」

「あれ、とは？」

「……はつきりとは分かりませんが……

“声” が、聞こえたんです」

「！」

アツシユの目が見開かれた。

瞬時に脳裏には冷ややかな表情と銀髪が過る。<sup>よき</sup>

「詳しく、聞かせてもらえますか？」

切り返したのはジュニアだ。

だが、その反応の素早さが逆に動揺を浮き彫りにした。

“声” が聞こえる……そのフレーズの持つ忌々（いまいま）  
しさに、

吐き気すら覚える。

「実験の最中です。試した呪文が不発に終わり、

今回も失敗したと思ったその時に……声が」

「どんな？」

「どんな……ええと……それはほら……

あれ？ 思い出せない。何だったかな？」

「おっさん！ まさか忘れたわけじゃないよな？

ついさっきの出来事だろ？」

男の頼りなさに痺れを切らしたアツシユが声を荒げた。  
真剣にやれと言わんばかりの勢いだったが、  
男にふざけている様子は窺えない。

眉間に寄せられた皺の本数がむしろその真剣さを物語っている。

「確かに声が聞こえたはずなんですけど……」

何と云うかこう、呆れ返った感じの雰囲気だ

「呆れ……。それは……溜息の類のようなものでしょうか？」

「……そうでもあったような、気がしますねえ」

「はっきりしねえな。どっちなんだよ一体？」

「うーん……これだけは言えます。」

溜息ではありませんでした。

何か一言を、魔物が呟いたんです

自らに言い聞かせるように、はっきりとそう断言をする。

「魔物だったんですよ。それ以外にない」

「そうとも限りません。実験中ということなので、

何かが何かの反応を起こした音が呟きに聞こえたという可能性も  
あります」

「空耳だったと？」

「なぜなら、我々がこの部屋に侵入した時ここは密室状態でした。

魔物が居たならどこから脱出を図ったのか

「この窓ですよ！ 割れてますし！」

完璧な証拠を得たかのように、

興奮気味に割れた窓を男は差し示してみせる。

ジュニアは静かに首を横に振った。

「申し訳ありません。それは私が、



「部屋に光を取り込むために魔術で割りました」

「あ、え？ そうなんですか？ 魔術……」

男はきよとんとした顔でまずアツシユを見遣り、

もう一度ジュニアに視線を戻した時にはその表情は目に見えて沈んでいた。

唯一の、立証の術を失ったからだ。

「ですから、結論はこうです。

魔物が居たと言うなら、まだこの部屋に潜んでいるはずですが。

でもその可能性は極めて低い。

初めから居なかったと考える方が自然です」

「……そうですか……でも、まだ一つ疑問が残ります。

私が石になっていた、というのは？

その間の記憶が私にはありませんが、もし本当なら、

もしも魔物でなかったとしたら、何者が私を石にしたのです？」

途中から、男の声は震えていた。

そんな事があるわけではないと心で思っても、

突如現れた希望に喜びを隠し切れなかった。

震え出す両手を見つめ、

「魔物じゃない……ということとは、つまり……っ」

「“悪魔” なわけないだろ？ あの古代書には、

召喚された悪魔は契約を結ぶまで姿を消さないって書いてある。

ここに悪魔らしき姿がないのが一番の証拠だ」

「記録書は記録書、いろんな可能性はあり続けるのです。

絶対に違うとは言いません！」

「じゃあ仮に、悪魔の存在を肯定したとして、

契約もせずあんたを石にして一体何の意味がある？

契約で一番おいしい思いをするのは悪魔自身のはずだ。

それをみすみす逃すこと自体話が破綻はたんしてる」

「わ、私たちには分からない、

悪魔なりの理由があつたんですよ、きつと！

……うう」

自らの発言に頭を抱える。

研究者としての性分が根拠の無い話をするのを許さなかった。

悪魔の個人的な事情の話など、全く論理的ではない。

唸り声はほどなく、自嘲的な笑みに変わる。

「ああ、駄目ですねえ」

ふうつと大きく息を吐き、

男は本の散乱している窓辺へ歩み寄った。

一番手近な本を持ち上げ、

長年の情性を象徴するかのように堆積した埃を払ってやる。

「もうずいぶん長くやっています。

悪魔研究は……途方もない事だと頭では分かっていますが、

明らかにするとそう決めた日から、盲目的に研究に没頭してきま  
した。

悪魔が迷信だなんて考え、本当はとうの昔に捨てさっていた。

それを、久しぶりに思い出しました」

悪魔、と書かれた本の表紙を見つめていた男は、

それを目の前の本棚へそっと立てかけた。

そしてくるりと振り返り、二人に真顔を向ける。

「だから、絵空事でも可能性は可能性。  
私が石になつていたことを悪魔以外のことで証明できない限り、  
私はこれを研究成果として記録するだけです」

自分の信じる道を、疑いなく歩み続ける。

そんな心の持ち主の目を、アツシユも真正面から受け止める。

「証明できると言ったら？ 今ここで、完璧に」  
「……………」

男は数秒無言でいた。

が、すぐに場の緊張感は消え失せる。

男は微笑った。

「不可能ですよ。残念ながら」

余裕たつぷりに、ふてぶてしくさえある男の答えは<sup>すがすが</sup>清しい。  
二人も呆れ半分で笑顔になる。

「こんなところでしょうか、依頼は」

「だな。あ、おっさん、一つ訊きたいことがあるんだけど」

「はい。何でしょうか？」

「ここおっさんの他に誰か住んでる？ 家族とか」

「あ……………残念ながら一人です。見ての通りで……………。  
妻は息子を連れて出て行ってしまいました」

急激にテンションを下降させて男はうな垂れる。

失礼極まりない質問に眉根を寄せて諫める<sup>いさ</sup>ジュニアの視線に、

気付いていたからなのかどうなのかアツシユはそれ以上深入りする  
ことなく、

軽く首を捻りながら一応謝罪の言葉を口にした。  
言いつつ部屋を後にしようとするアッシュの肩をジュニアが素早く掴む。

「待てアッシュ」

「なんだよ？ まだ何か」

「有言実行は人としての美徳だ。忘れたとは言わせない」

ちらりと向けられた視線の先には、

そよそよとカーテンのなびく、ガラスの失われた窓枠。

「！ わ、忘れるわけないだろ……怒るなって」

「怒ってはいないが、それについては後でゆっくりと」

この日一番の“笑顔”に逆らえるはずもなく、  
アッシュはしぶしぶ魔術で窓の修復をした。

事情をよく理解していない男にはこの上なく感謝されるも逆に心  
苦しく、

今後はもう少し自重すべきだなと、珍しく落ち込むアッシュだった。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と6（前書き）

約一年ぶりの更新になってしまいました。

相変わらず遅々とした更新ペースになるかとは思いますが、必ずや完結させますので、どうぞ、お楽しみ頂けたら幸いです。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と6

一日の任務を終え、宿舎兼事務所へ戻る彼女の表情には疲労感が滲み出ていた。

いつもの様に綺麗な文字で並べられた指令の内容は、殆どが聞き込み調査か資料調べであり、体力勝負の物捕りとは対極の仕事であるにも関わらず、漏れる溜息は重々しいことこの上なかった。

と言うのも、一日かけて調べ回った割りに何一つ成果はなく、この後に控える報告という日課を思うと、心はきりきりと悲鳴を上げる。

通常、この種の捜査は手がかりを見つけていることが目的であるため、何も成果が上がらないという過程を通るのは当然といえば当然で、むしろ成果のないことを報告するのも大切な結果報告なのである。何も手がかりがない、という状況からも、新しい事実が浮かび上がってくるのだ。

彼女もそれ位の事はきちんと理解している。

一日適当に時間を過ごした訳ではないのだから、

これと言ったものが見つからなくてもその日の奮闘ぶりさえきちんと伝えれば、

ある意味彼女の役目は全うされる。

この任務においてパートナーである彼も、彼女の頑張りを褒めるだろう。

ただ一言、そうか、お疲れ様、と、クールな表情を崩す事無く、淡々と。

(どれだけ手ぶらで帰ったって、先輩はいつもあんな調子。失敗したって怒らないんだから、当然か……)

彼女は、腕に抱えている紙袋を見詰めてほっと息を吐いた。帰り際に寄ったお店で買った、これは頼まれていないものだ。もしかしたら、無駄な買い物と、怒鳴られるかもしれないなど、

期待を寄せて購入に踏み切った、自分でも訳の分からない行動の証である。

(子どもじみてるなあ。こんなことしたって何も変わらないのに。  
“怒って欲しい”なんて、馬鹿みたい)

それが、いつでも優しい先輩に対する、彼女の願いだ。先輩の役に立ちたいと思ってここまで必死に走って来ている。だが、先輩は今もずっと遠くにいる気がしていた。パートナーなど名ばかりで、彼女にはその実感の欠片もない。だから必要以上に“何か”を求めてしまうのかもしれない。

自分を自分として、  
一人前の人間として認めてもらえているという実感が得られる、  
そのきっかけになれる何かを。  
一日の任務でも、それ以外でも何でもいい。

(私はまだまだ先輩の足元にも及ばない。失敗ばかりしてる。  
だから、怒られて当然なんだ、本当なら。  
でも怒られないって事はつまり先輩は私を、  
怒るほど価値のある人間じゃないって思ってるって事)

そこまで考えて、又胸の辺りを強く押さえた。

少しはましになったと思っていたが、  
ネガティブな感情が今にも溢れ出しそうになった。

（「甘えた事言ってるじゃねえ、バーカ!

言いたいことがあるんなら、はっきり言えばいい」

「!」

突如、頭の中にそんな言葉が蘇る。

あの男が言い放ったものだ。

自分が一番欲していた言葉をいとも簡単に見つけて、ぶつけてきた。

そうだ、あの日から自分は幾度となくこの言葉に支えられている。  
まるで魔法の呪文の様に。

彼女は顔を上げ、眉を顰めて目を見開く。

バーカ、という声に向かって、大きく息を吸った。

「バカですよーっだ!!」

「……アンナ?」

「っ!?!」

背後からの声に飛び上がるほど驚いて振り向くと、  
怪訝な表情を浮かべた先輩が立っていた。  
真っ赤になった顔から大量の汗が噴出する。

「せせせ先輩、はやっ早かった、んのですねっ!?!」

「まあ、どちらかと言えばいつもより遅いのだがね。

……それより、大丈夫か? 扉こんなどこの前で何を?」

「いやっ、その、あははっ、特に、何も!」



「……そうか」

アンナの挙動不審ぶりにもそう短く返しただけで、先輩 ジェクトはアンナの背後にある事務所の扉にちらりと視線をやる。

「あ、す、すみません、どうぞ！」

素早く脇へ寄ったアンナにも視線をやると、入る様促した。

「失礼します。あの、すぐに紅茶をいれますね」

「ああ、頼む」

ジェクトはソファに身を沈めながら答える。

朝一番にコーヒーを、仕事終わりには紅茶を、というのが日課だった。

適量の水をやかんに入れ、火にかける。

ガラス製のティーポットには二人分の茶葉を用意し、ティーカップも二つ並べた。

手際よくここまでやってしまうと、後は水が沸騰するのを待つだけだ。

ソファに座るジェクトは夕刊を読んでいる。

そのページを捲る音を耳にしながら、

ことごと音を立て始めたやかんをぼーっと見詰めた。

アンナはこっそり溜息を吐かざるを得ない。

なぜならこの紅茶がジェクトに渡ったその時、

その日一日の報告をしなければならぬからだ。

(ああ、さっきの見られちゃったな……  
これでいつも通り、特にありません、の報告なんてしたら、  
きっと呆れ返られてしまう)

ピ、ピー、と、

沸騰を知らせるやかんの音に思考は掻き消され、

慌てて火を消す。

布巾でやかんを持ち上げてティーポットへ湯を注いだ。

蓋をして約一分。

カップに注ぐと紅茶の良い香りが辺りに立ち込めた。

全てが整うと、アンナは心を決めてジエクトへと向かう。

「どうぞ」

「ありがとうございます。いい香りだ」

「はい」

アンナもソファに座ると、ジエクトは新聞を畳んでテーブルの端に置く。

二人で紅茶を一口ずつ飲み、ほっと息を吐いた。

「アンナ。今日は、特に変わった事は？」

「あ、いえ、特に……」

「そうか」

「すみません。今日も何も手がかりが掴めなくて、私」

「いや、いいんだ。」

「一気にいろいろ出てくるような捜査方法を取っていないから、それでもいい」

「はい。でも、頑張ります」

「……くれぐれも、危険な行動はしないように」

「分かっています」

また、心がちくりと痛む。  
優しい眼差しが大きな重圧となつてのしかかる。  
アンナは軽く首を振り、また紅茶を一口啜った。

「この間の新聞記事の件を覚えているか？」

突如ジエクトが切り出した。  
アンナは少し考えて、すぐに頷く。

「はい、あの、隣町の銀行強盗ですよね？」

「そうだ。動きがあった」

「！ もう、どこか別の銀行を？」

「銀行ではない。民家だ。比較的大きな屋敷を狙っている。  
隣町からこの町までの間で、三件。

「重体者こそいるものの、死者は出ていない」

「よ、良かった……。あ、いや、でも、全然良くないです！」

両手に拳を作つてころころ表情を変えるアンナに、  
ジエクトは目尻を和らげる。

「ティーカップを持ち上げ口に含むと、もう片方の手で夕刊を広げ  
た。

ページの後ろの方の小さい記事を指し示す。

「これがその記事だ」

「何か……スペースが小さいですね」

「先日の銀行強盗事件とは別件として取り上げられている。

「だが、我々に捜査依頼がきている以上、これも同一犯の犯行と見て間違いない」

「……証拠は、あるんですか？」

「現場写真を見た。明らかな魔術の形跡があった」

「ということは……やっぱり次は、」

「この町だ。明日から銀行周辺にいくつかトラップを設け、徹底マークする。」

アンナも私と行動を共にしてもらおう、いいな？」

「は、はい！ 頑張りますっ」

アンナは立ち上がってそう返事をした。

ジエクトは少々面食らってしばし沈黙していたが、程無くして青い瞳を細める。

「頑張り過ぎない様に、アンナ」

「あ、は、はい……気を付けます」

勢い込んだ分、前のめりになった気分です、アンナはすんと、とソファへ沈み込んだ。

ジエクトは夕刊を畳んで立ち上がり、紅茶を片手にデスクへと移動する。

それきり、無言で何やら書類に目を落として集中し出してしまった。

アンナは残りの紅茶を一口で飲み干してしまつと、

自らもまた無言で洗いや物を済ませ、心持ち整理整頓をし、ジエクトの前に立った。

「お先に失礼します」

「ああ、お休み」

視線は落としたままでジエクトが答える。

アンナは深々と礼をして、また顔を上げた。

そして、そのままジェクトを見詰める。

（ 「言いたいことがあるんなら、はっきり言えばいい」 ）

また、あの男の声が木霊した。

気配を察したのか、ジェクトが不思議そうに顔を上げる。

「どうした？」

「いえ……その……」

先輩も、早く寝て下さいね。

いつも私より遅いのに、朝は早いから、  
いつ寝てるのか心配で」

「……………」

ジェクトはすぐには何も言わなかった。

それがアンナを不安にさせたが、言ってしまったものはどうしようもない。

すぐさま謝って退室しようと思構えた時だった。

「それもそうだな。私は気付けば、睡眠をさぼってしまいがちなんだ。」

こうして注意されてみると案外効くものだ。

今日は君の忠告通り、早く寝るとしよう」

「あ、あのっ……すみません、私、何て言うか、つい」

恐縮するアンナの頭部に、ぽふ、と、暖かい何かが降って来た。  
目の前にはジェクトの微笑み。

「ありがとう、アンナ。お休み」

ぼんぼんと二、三度頭を撫で、ジエクトがそう呟く。

「お、おや、おやすみ、なさい」

そこからどうやって事務所を出たのだったか、記憶は曖昧だ。

アンナは一人、自室のベッドの上で、

果たしてあの発言が正しかったのかどうか必死に判断しようと、ジエクトの行動と言葉を繰り返し再生させた。

そうしながら一方で、それが無駄な行為であることも分かっている。

あんな微笑み、これまで一度だって見たことがないのだ。

判断基準がない物に是も非も付けられるはずがない。

それでも、この鼓動の半分は満足感であることに違いはない。

これを、ずっと求めていたのではないか。

(何か、ヘンなの！ 嬉しいような、泣きたいような、  
ぜんぜんよく分からない！)

明日からの任務を思い、アンナは更に頑張ろうという気持ちになった。

もっと色んな事をジエクトが話してくれるように、

早く一人前の人間になってやるのだと、高揚した気分のままぎゅっと瞳を閉じた。

## 第五章 “邂逅” ひとつの後悔と7

「何だつて!?!」

「だーから、ベッドの数が足りないから、そのまま分りリビングのソファで寝てね、って言ったの」

依頼を終えて帰ると夕飯の時間帯だった。

毎食の料理を担当しているリゼの腕前は、

時々叔父の代わりに店の料理を作っていたというのも頷ける程相  
当なもので、

アッシュに至っては色んな意味で感激せざるを得ない、  
至福の時間になっていた。

だから、今日も疲れた身体を癒すが如き美味に舌鼓を打ち、  
そうして毎回惚れ直す彼女との二人の時間を心待ちにしていたア  
ッシュにとって、

夕食後、ダイニングで引き続き至福の時の余韻に浸っていた心を、  
何の前触れもなく地に叩き付けるかの様なキキの発言に耳を疑っ  
た。

それまでもアッシュは一人リビングに追いやられ、  
ソファで寝起きをしていた訳だが、  
最長でも二、三日と決め込んでいたから言われるままにしていた  
のだ。

それがここに来て無期限宣告。  
少々納得のいかない展開である。

思い切り眉を顰め、反論する。

「ちょっと待てよ！ 何かおかしくないか？」

「どういう理屈でそうなるんだ？」

「だってロナくんは子どもだし、順調に回復してても一応ケガ人よ。弱き者に譲ってあげるのが人の道ってやつでしょう？」

「ケガ人って、もうあんだけ回復してりや、

あいつがソファで寝たって問題ないだろが」

「だから言ってるじゃない。

ロナくんは子どもなんだからベッドくらい譲りなさいよ。

そんなムキになって口論するほどの問題？ これ」

はあつ、と大きく息を吐き出し、キキは両の掌を上向けた。

呆れ返った顔で、何故か必死に自らの寢床を死守しようとする、  
年齢<sup>よわい</sup>二十歳の金髪青年を見上げる。

「ロナくんが最優先！」

だから大きいベッドをロナくんが使うの。

りっちゃんはそのまま簡易の方でいいって言うてくれたから、  
そしたらアッシュがソファで寝るしかないじゃない？

それとも、りっちゃんを部屋から追い出すつもり？」

「いやそんなことしたら本末転と じゃなくて！」

そうじゃなくてもっと他に方法ないのかって言いたいんだ俺はっ」

「無いからこうして恭しく<sup>まじまじ</sup>あんたに頭下げてんじやない」

「んな態度かよそれ！？ ……あー！ 納得いかねえ！

って言うか、何でお前の部屋じゃ駄目なんだ？

部屋に置いてるベッド一つだし、

管理人に頼んで簡易ベッド借りれば一件落着じやないのか？」

「はあつ。そんなの、私が考えてないとも思った？」

「思った！」



真剣に頷くアツシユの脳天にキキの鉄拳が下る。  
アツシユは声も無く頭を抱えて蹲すくまった。

「とつくに考えてるわよ！」

確かにジュニアとは “一緒に” 寝るから  
二つもベッド必要ないけど 「

キキはアツシユの反応を窺いながら、

一番ダメージの深そうな単語にアクセントを置く。  
チツ、とアツシユは舌打ちして、

「当て付けかよ」

と、吐いた。

「他にも理由があるのよ」

一矢報いてやった満足感から、  
些ちか落おち着ちきを取り戻したキキが続ける。

「私の部屋の散らかり様知ってるでしょ？  
発明に必要な器具とか薬品とか、部屋の半分を占めてるの。  
それに道具達は危険だからジュニアにだって触らせないわ。  
もし、何も知らずにロナくんが触れてケガでもしたら？  
結論、危険はあってもスペース無し、ってこと。」

あ、片付けるなんて言わせないわよ。  
それはあんたにとって “退治屋やめろ”  
って言われるのと同じ事なんだからね？ 「

「あーはいはい。分かったよ。  
俺がりビングに住めばいいんだろ。ったく」

両手を肩の高さに挙げ、降参のポーズをしてみせる。  
何となくやり込められた感はあるが、  
口の回るキキにこれ以上付き合える精神力は残っていない。アツシユの完敗である。

「うん、分かれればよし」

そう言うにつっこり笑むキキを見た途端、急激に脱力感を覚えた。アツシユはさすがごとリビングへ退散し、引き続きお世話になる、あまり弾力のないソファへと勢いよく腰を下ろす。そのまま天井を仰ぎ見、ふつと息を吐いた。

「あー……上手くいかねえなー……」

声を出して呟くと、沈んでいた気持ちが一瞬和らぐ。ロナという少年を偶然拾ったその日から、リゼと二人で過ごす時間が殆どと言っていい程無くなった。

理由は分からない。

ただ単にアツシユは退治屋の仕事、リゼはロナの看病というありがちなすれ違いの所為なのだろうが、タイミング良く存在するロナという非日常に、自らの不運の根源を見出したくなってしまった。

一方でロナにとつたらとんだ濡れ衣で、つまりこれ以上原因を追究するのは無意味なのだ。

逆に、ストレス解消方法ならもっとはっきりしている。

リゼだ。

(うおー。今、君をモーレッツに抱きしめたい)

本能の叫びが頭の中をぐるぐると駆け巡った。

「…………アつくん？」

突如、天井を映していた視界にリゼの顔が飛び込んで来た。アツシユはびくつと身体を震わせる。

「うわっ！ びっくりした…………りっちゃん」

改めて背後を振り返り、

可笑しそうにしているリゼをじっと見詰める。

確か夕食後、ロナと一緒に風呂に行くと言っていたが、濡れた髪がそれを証明している。

リゼの髪は水に濡れると元々のウェーブが更にくるくるになり、本人は気にしているようだったがアツシユは密かに気に入っていた。

リゼは、いつまでも無言で注がれる視線に首を傾げて、大きな瞳をぱちぱちとさせる。

「アつくん？ どうしたの？」

「え、あ、いや…………ここ、座る？」

ソファをぼんぼんと叩いて促すと、

リゼは笑顔で「うん」と答える。

数歩歩き、アツシユの隣に座り込んだ。

「……アつくんごめんね」

座るや否や急に謝罪を口にしたリゼに、  
条件反射ほどの速さで「何が？」と問い返す。  
リゼは申し訳なさそうに苦笑を浮かべた。

「さっきキキさんから聞いたの。」

アつくん今日からここで寝るって」

「ああ、なんだそんなこと、謝らなくていいよ。  
それが一番いい方法だし、ははっ」

つい数分前のキキとの激論など嘘のように、  
アツシユはあっさりとその風な風に答える。

これが果たしてキキの作戦なのかどうかまでは分かりかねたが、  
カラ笑いした後、自然と溜息が零れた。

しかし、

「本当にごめんね。でも、ありがとう」

と、弱みであるリゼのにつこり笑顔を見せられては、  
アツシユの思考回路も緊急停止せざるを得ない。  
こうして、この問題はここに完全に解決したのだった。

束の間、決して嫌ではない沈黙が二人を包む。

視界の端でリゼの髪が揺れ、  
アツシユがそちらへ顔を向けると瞳が合った。

「何だか久しぶりにアつくんと話してる感じ。

ヘンよね、毎日顔合わせて、話だっしてしてるのに」

「いや、俺も同じ事思ってた。

二人だけの時間ってなかったから」

「うん、そうね。……ふふっ」

本当に嬉しそうに、ほんのり頬を染めてリゼが笑う。

その様子にアツシュの心が跳ねた。

だが、なぜか視線を逸らし、慌てて他の話題を口にする。

「えと……ロナ、だっけ？ あいつの調子どう？」

「ロナくん？ うん、もうずい分良くなったわ。

あとは無理せずに、栄養をしっかりと摂る事ってキキさんが言ってた」

「そう……他に変わった様子はある？」

「うーん、変わった様子……」

リゼは真剣な眼差しで質問の答えを探しているようだった。

反面、アツシュにとっては実は、

その場しのぎの話題でしかなかったため、

答えなどどうでも良かったのだが、

リゼから返ってきたのは意外な言葉だった。

「そっついえばね、夜、ひどくうなされてるの……

とても苦しそうで……

心配だな」

アツシュはすぐには言葉を返さなかった。

いわゆるストリートチルドレンとは、

普通ではない過去を持った子どもたちであり、

逆に言えば何かあったからストリートで暮らさざるを得なくなっ  
た、

悲しき子どもたちなのである。

だからロナが、寝てもうなされているといふ事はむしろ、  
当然といえば当然なのだ。

あの幼さでほぼ全てを失ったという境遇を、

そう簡単に理解できるものではない。

中途半端な同情をかけてやれば余計に彼を傷付けるだろう。

そこまで考えて、アッシュは改めてリゼの表情に見入った。

そこには演技では作れない憂慮のオーラが満ちていた。

リゼの気持ちは中途半端な同情とは違う。

「リっちゃん」

「あ」

不意を付いてアッシュがリゼの肩を抱き寄せた。

左手でぎゅっと力を込める。

「何かあったらいつでも俺に言って。」

早朝でも、真夜中でも、依頼中でもさ。

全然構わないから」

「……うん。」

「ありがとう、アっくん」

リゼはそう呟き、

両腕を伸ばしてアッシュの身体に回したかと思うと、

一瞬だけ、きゅっと力を込めた。

だが、アッシュが驚く暇もなくリゼは立ち上がると、

耳まで真っ赤になった顔を背けたまま、

「お、おやすみなさいっ」

と言つて、逃げる様にリビングを出て行ってしまった。

一人残されたアツシユは、

まるで夢を見ていたかのような呆けた顔で空間を見詰めていたが、ハッと我に返ると身体を震わせる。

(夢じゃないよな!? リっちゃんが リっちゃんが )

「ぎゅって!! ぎゅってしたあ!!」

両手を握り締めて、思わず叫んでしまっていた。

リゼに聞こえやしないかとすぐ口を嚙くんだが、

この感動はしばらく冷めそうになかった。

ソファに備え付けのクッション 臨時の枕 に顔を埋め、

うおおっと声を上げたら、がばっと勢いよく顔を上げる。

そして仰向けに寝転がった。

(第一段階突破したかも?)

大部分は個人的な喜びに胸を躍らせ、一方では、

ただ純粹にリゼとの心の距離が縮まっていることを実感出来た喜びに、

しみじみ感じ入る。

思わぬ 「ぼた餅」 ゲットにより、

リビング住まいも悪かねえな、と、アツシユは上機嫌で呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8391h/>

---

ジキア 2

2011年9月11日15時52分発行